

Tsukuba

COMMUNICATIONS

Spring

対談 サッカーと地域貢献



米倉 実氏 × 中山 雅史氏

前筑波大学副学長・理事

元サッカー日本代表



Interview

新学長に聞く



- 12 聴 柳沢正史 教授
- 14 OB&OG 松尾剛 氏
- 16 学内組織紹介 プラズマ研究センター
- 18 名物先生登場 小澤啓 教諭(附属高等学校)

- 20 Sports Club 男子バレーボール部
- 22 Art & Culture ジャグリングサークル「Sheep」
- 24 Homeland チュニジア共和国
- 26 TOPICS

- 30 リレーエッセイ
- 32 茗溪会・紫峰会
- 34 新聞掲載・テレビ放送一覧
- 35 イベントカレンダー



Interview

新学長に聞く

平成25年4月1日より、永田恭介先生が筑波大学長に就任されました。

「学長室はいつもオープン。どなたでも、いつでも来てください」と語る永田新学長に、
本学の卒業生でもある職員2人がインタビュー。

さまざまな角度から、今後の抱負やビジョンについて、お話を伺いました。

宇宙人に地球の歴史と未来を語れる人を育てたい

栗原：まず初めに、学長に就任された心境を聞かせて下さい。

永田学長：就任が決まった頃には、総合大学であり、その上新構想大学、そして未来構想大学として、他の大学にはないこともたくさんあって大変だろうなと思いました。でも今は、僕が覚悟を決めて、どこまで働けるかということが重要なのだと思っています。本当に、責任の重さをひしひしと感じています。

霜鳥：本学を含む大学全体を取り巻く環境や、社会の期待について、どのように考えておられますか？

永田学長：日本だとか、本学だとか、私だとかを、何かと比べる…そういう時代ではないのかなと思っています。例えば、自分の育った町には仲間意識がありますよね。そうすると、その町と他の町を比べたがります。それがもう少し大きくなると、県と県、日本と外国…と比べるようになります。でも、俯瞰的に見ると、比べるのではなく、いかにしてお互いに力を合わせていくかという考え方になるのではないかと思います。それを僕は、わかりやく、「宇宙人に地球の歴史と未来を語れる人を育てたい」と表現しているんですけど。

栗原：宇宙人…ですか？



栗原 宏太 教育推進部教育機構支援課
(工学システム学類：平成21年卒／システム情報工学科：平成23年修)

永田学長：どこから宇宙人がやって来て、「話をしよう」と言われたら、もう国は関係ないわけですよ。誰かが出て行って、地球のことを語らなければなりません。かえって分かり難いたとえばたのかもしれないけど、個々のことを比較して、一方方向から主張する時

代じゃなくて、未来の幸福な地球社会の実現をどうするかという観点から、知と人を育てることを大学は考えていくのだと思います。このたとえを言うと笑われることが多いのですが、僕は真面目に考えています。

霜鳥：そのように考えるようになったきっかけはありますか？

永田学長：科学を勉強する中で学んだことです。科学では、わからないことがあった時に、ひとつ上の視点に立ち戻って考えることで、その問題とか、解決しなければいけない課題が、より解きやすい状態になります。

学位プログラム化を目指して

栗原：今後2年間に取組む、具体的な施策をお聞きたいと思います。まず、教育の実質化について、今後どのようにやっていくおつもりですか？

永田学長：たくさんありますけれど、大きなことを具体的に1つだけ…。学群、大学院教育の学位プログラム化を進めたいと思っています。欧米諸国では、基本的には全て学位プログラムですから、世界との教育システムの互換性もできてくるでしょう。

栗原：学生支援の充実については、どのように考えていらっしゃいますか？

永田学長：今までは、経済的な困窮への支援とか、既定のプログラムに参加するための支援というのが主でしたが、これからは、「こういう仕組みがあるから」ではなくて、「自分で開拓して、新しいことにチャレンジする」ということにも支援していきたいと思っています。目的は、学生が自立することです。

栗原：研究力の向上については、どのようにお考えでしょうか？

永田学長：いかにして「個々の研究レベル」と、その大学にいたからこそできる「グループでの研究力」を上げるかという問題だと思います。個々の教員の研究力を上げるためには、適正な支援を行わなければなりません。今は、どの系の先生も同じ評価シートを使用していますが、もう少し学問の特性に合わせた評価軸を取り入れて、適正な

評価・支援をし、大学の研究を個人レベルで支えるようにしていきたいと考えています。それから、グループの研究力の向上についてですが、本学には、計算科学センターとか、TARAセンターのように、グループでの研究が学内外にインパクトを与えているような成功例がありますから、そういうところの運営方をうまく見習って、研究に特化したグループを作り、長期的に取り組んでいきたいと考えています。こうしたグループでの取り組みは、今まで理系の方が多かったのですが、今後は、人文社会学系でもやっていけたらいいなと強く思っています。

霜鳥：具体的には、どのような…



霜鳥 彩友美 総務部総務課
(社会学類：平成23年卒)

永田学長：素人的なたとえばかもしれませんが、古代文明の研究からわかったことを現代社会の成り立ちに生かすとか。いかにして言語のコミュニケーションが図られるようになったかを現代社会に持ってくるとか。もともと筑波大学の人文社会系は、すごく力を持っているので、研究を元に、社会改革に向けて力を発揮できるような仕組みを作りたいと思っています。

栗原：話が少し逸れますが、永田学長ご自身は、どのような研究をされてきたのですか？

永田学長：研究課題はいくつもありましたが、一番みなさんに分かっていただけなのは、インフルエンザウイルスがなぜ増えて病気を起こすかという研究です。なぜ増えるのかということ、分子生物学的な言葉で解説して、病気を起こす仕組みを明らかにしてきました。そこが分かると、治療法や予防法が出てきます。この研究は、今、新しい

抗インフルエンザ薬の開発にまでつながっているところです。研究で大切なのは、オリジナリティやユニークさです。他の方ができるならばやってもらえばいいので、自分にしかできないことを追求してきました。今後、研究からは少し離れることになると思いますが、僕の教えた子たちも、同じ心構えでやっていくと思います。

グローバル・コモンズは“すぐやる課”

霜鳥：今後に取り組む施策の話に戻りますが、学園都市の各研究機関や、つくば市、県との連携についてどう思われますか？

永田学長：まずは、つくばの中で、筑波大学がUI…ユニバーシティアイデンティティーをしっかり見せて、つくば文化圏というようなものを先導しないといけないと考えています。そうすると教育連携や研究連携なども、自然に行われていくのではないかと思います。

霜鳥：国際化についてはグローバル30という取り組みがあり、新たに、グローバル・コモンズが開始しますが、これらについては、どのようにお考えでしょう。

永田学長：まず、「我々は国際的な環境の中に日々いるんだ」という認識を持つことです。グローバル30は、教職員のみなさんのすごいご努力で、日常化への引き金を引いてくれたと、高く

評価しますし、感謝もしています。この次の段階としては、大学ぐるみで、国際性の日常化を推進していかなければなりません。「教職員、学生、誰にとっても、そこに行けば、当面のことは全部済む」という組織を作れたら良いだろうと考えて、新たにグローバル・コモンズを立ち上げました。教育推進部と国際部が縦割りではなく、学生部とも一緒になって問題解決にあたるというのが、グローバル・コモンズの考え方で、国際性の日常化を進める「すぐやる課」みたいなイメージを持っても良いのではないかと考えています。

筑波大学のアイデンティティを社会に

栗原：次は、附属病院についてなんですけれど。新棟が完成して、これから、地域の中核の病院を担って行くためには、どうしたらいいとお考えですか？

永田学長：実は、県や市とも協力して、数年前に比べると、地域に貢献する病院に大きく変わりました。さらに、どんどん進めなきゃいけないことです。しかし研究大学の附属病院というのは、連携する先の病院を含めて、一般的な診療能力に加えて、患者さまの立場からは「ここに行くと、こういう新しい医療が受けられる」、医師の側から見ると「ここに行くと、こういう専門家になれる」という特長がある病院になることが重要

ではないかと考えています。今は、過疎地の病院などでは、とにかく人を集めることだけでも大変ですけど、「あそここの病院にいけば、新しい医療が学べる」ということになれば、日本全国から、お医者さんが自然に集まるようになります。大学の力で、人が自然と集まるようなサテライトの病院を作っていく…それが、大学の病院の研究力や教育力を上げることにもつながると思っています。

栗原：附属学校との関係についてはどのようにお考えですか？

永田学長：一つは、附属学校教職員と大学の教職員が互いに協力し、利用し合うことです。附属学校から本学に来て修士を取って戻る、というようなシステムはありますが、もっと大々的に交流が起こらなきゃいけない。そして、もう一つは、附属支援学校の強化です。個々の学校ではできない、世界に冠たる筑波大の支援学校群だからこそできることを打ち出していかなければなりません。今は、障害者の雇用機会均等というのが当たり前になってきていますから、そういう社会の中の一員として活躍する人材を育てられるような支援学校になってほしい。さらにいえば、ダイバーシティを生むモーターになってほしいと願っています。

霜鳥：大学のブランディングについてはどのようにお考えですか？

永田学長：筑波大学というもののアイデンティティを社会にしっかり見せな





ればなりません。ですから、「筑波大学って何ですか」ということは、非常に重要なことで、山田先生がずっと進めてこられた「IMAGINE THE FUTURE.」を中心とした大学ブランディングは、いい道のりを来ていると思います。しかし、我々にはまだまだやらなければいけないことがあります。すごく先端的で、素晴らしいことをたくさん行っている大学であるのに、それを十分に社会にアピールできていないということなどは、まず改善していきたいことです。今、山口さん(山口香准教授・体育系)が、女子日本柔道の体罰問題で、正当で、非常に公平な意見を述べています。あれこそは、体罰がなく、「合理的にスポーツを教える」ということが浸透している本学の先生だから言えるのだと思っています。山口さんが頑張っている時に、我々は、筑波大学のそういう面をもっとアピールするべきでした。そういうところが、いつも押えぎみなのですが、これからは、前に出していく努力をしないといけないと思います。

霜鳥:教職員とのコミュニケーションについてはどのように考えていらっしゃるのですか？

永田学長:学長室はオープンです。どんなでも、いつでも、どうぞ来てください。

こちら、ほとんど予告なしに、部局に出かけて、いろんなものを見せてもらおうと思っています。教育の現場や、研究の現場を見ない限り、本当のコミュニケーション図れないと思うからです。

栗原:学生とのコミュニケーションについてはどうですか？

永田学長:学生さんとも同じです。コミュニケーションに関しては、紙ベースでなく、会うこと。たとえば、お昼休みに食堂を回って、直に、希望や夢を聞き、不満の解消方法について議論したいですね。コミュニケーションを図ることに関して、労を厭うつもりはありません。

栗原:永田学長は、スポーツデーに出ているらっしゃるそうですね。

永田学長:毎年出ています。研究室とか、医学の仲間、サッカーとかバスケットボールとか、ソフトボールとか…。これからも、学生たちとは、なるべく一緒にやりたいです。スポーツだけでなく、学生たちの音楽も聞きたいですし、踊りも観に行きたいですね。僕の趣味は、やるのも、見るのもサッカーです。今でも試合で、オーバーヘッドキックをやって、腰を痛めたりしていますが(笑)。自分にとってサッカーは極めて重要です。学生たちも、何が何でも踊りが好き、歌が好きだと思って

課外活動をしているのでしょうか。そういう人たちが、いろんな能力を身につけて社会に出て行くわけです。そう思うと、学生の課外活動を応援してあげたいです。

卒業生の活躍が大学の価値を決める

霜鳥:全日本大学ラグビー選手権の決勝戦には、大勢のOB・OGが駆け付けて応援してくださいました。本学OB・OGを含めて、大学関係者が、一体となって大学を盛り上げていくためにどのようなことが必要だと思われますか？

永田学長:大学にとって、一番大切な資源は、卒業生・修了生です。現在大学で行われている研究や教育はもちろん重要です。それ以上に社会で働いている卒業生と修了生の価値が重要で、「育った学生が社会で見せているもの、そのものが大学の価値」ということを強く認識したやり方をしないとはいけません。学生や教職員、卒業生・修了生が一体になる、細かい仕組みについては、ここでは申し上げる余裕がありませんが、そういう観点で大学運営を進めれば、新たな改革をしていけるかなと思っています。

栗原・霜鳥:ありがとうございました。



対 談

サッカーと地域貢献

元サッカー日本代表

前筑波大学副学長・理事

中山 雅史氏 × 米倉 実氏

「筑波 イズ ベスト！」

米倉:初めまして。きょうは筑波大学の広報誌の対談ということですけれど、私は一人のサッカーファンとして、非常に光栄に思っています。

中山:ありがとうございます。

米倉:中山さんがサッカーを始めたきっかけは何だったのですか？

中山:自然の流れですね。僕の生まれ育ったところは、静岡県の岡部町というところで、今は合併して、藤枝市になっているんですけど、サッカーが非常に盛んなところですよ。でも、僕自身が、小学生低学年の頃にそれを感じていたかという、そうではないんですね。ただ単に、日頃の遊びの中で、サッカーや野球などをやっているうちに、サッカーは面白いな、自分に向いているのかな、と思って、小学4年生の時に、地域のスポーツ少年団に入ったのがきっかけです。

米倉:他のスポーツもお好きだったのですか？

中山:野球も好きでしたよ。サッカーが向いていると思ったのは、みんなより足が速くて、抜いていけたからだと思います。

米倉:藤枝東高校で活躍された後、筑波大学に入られたわけですが、なぜ本学を選ばれたのでしょうか。当時、2年先輩には長谷川健太さん(現ガンパ大阪監督)、同期には井原正巳さん(柏レイソルヘッドコーチ)など、すごいメンバーが揃っていたからでしょうか…。

中山:筑波のサッカーが強いという認識はありませんでした(笑)。僕が入る直前、蹴球部は、関東リーグ1部と2部の入れ替え戦に出ていたんですよ。入れ替え戦で引き分けだと残留できて、確か、引き分けでなんとか残ったような…。サッカーの強さよりも、親に負担をかけたくないという思いがあり、国立ということに魅力を感じて選びました。教員免許も取れるということでも…。先生からも勧められて、推薦試験を受けました。

米倉:筑波に来た時の印象はいかがでしたか？

中山:筑波の寮って、学生宿舎じゃないですか。部活動ごとの寮をイメージしていたので、最初は戸惑いました。全日本ユ-

ースの合宿から直接来て、初日は、カーテンもなかったんですよ。病院みたいなベッドに横になりながら、カーテンのない窓から外を眺めて、「あーなんか寂しいな」とか思いました(笑)。一人暮らしに憧れていたわけでもなかったの、最初の頃は、ホームシ-

ックになりましたね。慣れてくると、「ああ、これはいいなあ」と思いましたけれど。

米倉:中山さんは、「ゴン」という愛称で広く親しまれていますが、この愛称は、筑波大時代についたらいいですね？

中山:はい。TV番組でビートたけしさんおに がわら こん ぞうが演じたキャラクター「鬼瓦権造」に似ているからと、サッカー部の先輩が付けた愛称です。

米倉:筑波大時代には、2年、3年の時に、関東リーグ優勝。3年生の時には、総理大臣杯でも優勝して2冠を達成し、ベストイレブンにも選出されています。

中山:当時の試合のことを、まだよく覚えていますよ。順天堂大学相手にハットトリックして、引き分けに持ち込んだ試合とか…。各年代の日本代表クラスが揃った、強い時代でした。負けず嫌いが集まっていた、刺激し合っていましたね。

米倉:今年度は、男子バレーボール部が全日本大学選手権大会で優勝しましたし、ラグビー部も準優勝しました。なでしこジャパンの安藤梢選手(人間総合科学研究科 体育科学専攻 博士後期課程3年、ドイツ・フランクフルト)や、熊谷紗希選手(体育専門学群4年、ドイツ・フランクフルト)、ヤングなでしこの猶本光選手(体育専門学群1年、浦和レッズレディース)も在籍していて、今もスポーツの世界で、筑波大学の学生たちが非常に活躍しています。

中山:応援していますよ。各部活や、なでしこの安藤や熊谷など、筑波大の選手の名前を紙面などで見かけると、「おお。よくがんばっているじゃないか」と、誇りを感じます。ラグビーは、帝京大にリーグ戦で勝っているのに、決勝で負けたのがとても悔しかったですね。ただ、「筑波は、



筑波大学時代の中山選手 写真: 日刊スポーツ / アフロ

自分たちで練習メニューを決め、自分たちで勝つ術を学び、どうしたら勝てるか研究しながらやるのが伝統。帝京は、いろいろな指導者がいて、それぞれから厳しい指導を受けている」というような新聞記事を読んで、「筑波はこれで勝つことに意味があるんだ」と思いました。

米倉:当時の蹴球部も、「自分で考えて」という感じでしたか？

中山:そうですね。自分たちでやろうという取り組みの姿勢を、コーチたちがいろいろな提案をしながら促してくれていた感じです。

米倉:安藤選手は、筑波大学で科学的に走るトレーニングを受けて、非常に走るのが速くなったそうです。科学的なトレーニングの指導法という面では、筑波大学は、国内でもトップクラスだと思いますが、学生時代を振り返っていかがですか？

中山:大学院生の方がコーチをやってくれていたりして、いろんな競技から、基礎体力アップとか、敏捷性アップとか、サッカーに使えるようなトレーニングを持ってきてくれました。それに、体育専門学群では、いろんな種目の学生たちが、大学院生の研究に被験者として参加しているので、「これをやってたら、こうなれるんだ」という実験データをたくさん目にします。ましてや、身近な仲間が何かしらの向上が見られたならば、それは、自分にとって必要なことだと実感しますよね。自分もやれば伸びると、奮い立たせてくれる材料にもなりました。他の大学は経験していませんが、こういことは、筑波ならではなんだろうなと思います。僕は筑波大学で成長させていただきましたから、「筑波イズベスト！」と思っていますよ。



なか やま まさ し
中山 雅史 氏

元サッカー日本代表

1967年 静岡県生まれ
1990年 筑波大学体育専門学群卒業
1990年 ヤマハ発動機に入社
1994年 ジュビロ磐田としてJリーグ参入
2009年 コンサドーレ札幌に移籍
2012年 引退表明

個人タイトル: JリーグMVP、Jリーグ得点王2回(歴代1位)、AFCベストイレブン、Jリーグベストイレブン4回等、多数 日本代表歴: 1990-2003 ワールドカップ出場 1998(フランス) 2002(日本) 2つのギネスブック認定記録と、Jリーグシーズン最多得点、Jリーグでの通算最多ゴール、J1での最年長記録などの数々の記録を持つ

「自分の経験談が みなさんの心の強化に つながってくれば」

急激に進歩した 日本のサッカー

米倉: 日本のサッカーの話をしますけれど。私がサッカーをやっていた1970年～80年代に比べると、今の日本のサッカーは、ものすごく進歩したと思います。これは、どういうところが一番の原因だと思いますか？

中山: まず一つは、いろいろな情報が入るようになったということです。僕らの時代は、写真や漫画、書物からしか情報が得られなかったで、それをまねしようとしても、なかなかイメージできませんでした。今は、ヨーロッパや南米のサッカーを好きなだけ動画で観ることができます。それは子どもたちがイメージングを働かせる上ですごく大きいと思いますし、いろんなプレーに興味を持つことがレベルの向上

につながっていると思います。

米倉: なるほど…。

中山: それから、日本のサッカー協会が指導者制度を推進していて、協会が指導者を育成することで、どこでも同じような指導を受けることができるようになったということがあると思います。

米倉: JFAによる指導者講習会や、公認指導者ライセンス制度ですね。

中山: あとは、世界と戦う機会が増え、海外に移籍する選手も多くなって、いろいろな経験ができるようになったということです。アジアを勝ち上がらないと世界と対戦できませんが、その対アジアに対しても、苦勞をしていた時代がありました。やはり、ワールドカップ…ドーハの悲劇を経験し、その次のフランスワールドカップで世界に出たことが、日本のサッカー界の進歩に拍車をかけたんじゃないでしょうか。そう考えると、銅メダル

を取ったメキシコオリンピックあたりで、もっと日本のサッカーが成長するためのアクションがあれば、日本は別の方向に進んでいったのかもしれない。

米倉: Jリーグを作ったということやJリーグの百年構想などによって、サッカーに親しむ文化が少しずつ作られてきたというところは、急成長した背景として大きいのでしょうか。

中山: 大きいでしょうね。プロというものがあれば、まず、子どもたちにプロサッカー選手になりたいという夢を与えますし、その子どもたちを育てる側も、しっかりとした指導をしなければならないと考えますから。まあ、まだ20年ですから、文化に成り得ているかということ、まだまだだと思いますけれど、少しずつ地域にも定着してきましたし、その地域を活性化させる上でもいろんな部分で役立っているんじゃないかと思います。

米倉: 海外での経験ということについては…女子サッカーの猶本選手はまだ体育専門学群の1年生ですが、ぜひドイツに行きたいと言っていました。その年代から、もう、海外に出ようという意識があるのはすごいと思いましたね。

中山: そうですね。奥寺さん(奥寺康彦氏)であったり、カズさん(三浦知良氏)であったり、中田ヒデ(中田英寿氏)であったり、そういう人たちがいろんな道を築いてきました。今は、海外に行きやすい道ができて、もっと自分が成長するために、海外に挑戦する人が多くなってきましたし、海外でプレーしたいという情熱も強くなってきていると感じますね。今自分が若くてバリバリであったなら、自分も海外に挑戦しただろうな、と思ったりもします。

米倉: 先日、キリン・チャレンジ杯のラト

ビア戦を解説されていましたけれど。あれだけ直前に海外から多くの選手が来て、ちょっとした調整はするんでしょうけれど、試合をしてすぐ帰って…。ものすごくタフになりましたよね。

中山: 長距離移動は当たり前で、その中で、結果を求める、内容を求めるのも当たり前、という意識になってきました。本当に、頼もしいなと思います。

地域社会への貢献

米倉: 私は高校生の頃、「ドイツには地域ごとにスポーツクラブがあって、サッカーを中心に、いろいろな種目のスポーツクラブの人が集まって、交流したりスポーツを楽しんだりする社会がある」ということを知りまして、ものすごく憧れました。日本はちょっと遅れましたけれど、Jリーグができてから、少し

ずつ、サッカークラブと市民の間を埋めていただいているようで、嬉しく思っています。今、ジュビロ磐田とかコンサドーレ札幌は、地域にとって、私の憧れたドイツのクラブのような存在になっているのでしょうか。

中山: まだまだかな、と思います。地域の人たちに、そのスポーツクラブの会員になってもらって、クラブを盛り上げていってもらえるのが理想ですね。クラブに、地域の方が集まって運動を楽しめるような、公園的なものができるといいのですが…。地域の人たちが、チームと身近に触れ合える場所を作ることが必要だと思います。そこで、さまざまな人たちが知り合うことで、地域のコミュニケーションが強くなるということが、いろいろな意味で街を活性化させることにつながっていくのではないのでしょうか。

「トップアスリートの方々が 地域社会に還元するという マインドを持つことが重要です」

よね くら みのる 米倉 実 氏

前筑波大学副学長・理事

1981年	科学技術庁入庁
1992年	外務省在シアトル日本国総領事館領事(経済担当)
1995年	科学技術庁長官官房総務課企画官
1997年	〃 広報室長
2000年	通商産業省工業技術院研究開発官
2004年	文部科学省研究振興局 基礎基盤研究課長
2009年	経済産業省大臣官房審議官 (地域経済担当)
2010年	宇宙航空研究開発機構執行役
2012年1月	筑波大学理事
2013年4月	理化学研究所理事



米倉: サッカー選手として、地域に向けてのさまざまな活動をされたと聞いていますが、主にどのような活動をされていたのですか？

中山: チームを好きになってもらいたいという思いで、依頼があれば、スケジュールの許す限り、話をしたり、サッカー教室をしたりして、地域の方々と触れ合うような活動はしていました。後は、いろんなプレーをしたり、結果を残したりすることが何よりの地域貢献と考えて、試合に全力を尽くしていましたね。好きになったチームが強くなれば、その人たちも元気になれるだろうし、チームの話題が家庭の会話に入って行って、家庭の中も明るくなるでしょうから。

米倉: 日本は、トップアスリートへの支援が、スポーツ予算の7割を占めているそうです。本学も非常に貢献している、マルチサポート事業などもそうですけれど…。一方で、生涯スポーツなどへの支援などは、1割程度に過ぎない。そういう意味では、支援されたトップアスリートが、地域社会に還元していくというマインドを持っていたかどうかということが重要だなと思うんです。

中山: そうですね。私にできることは、サッカーしかありませんが、自分の経験談をみなさんに話すことによって、サッカーの強化だけでなく、心の強化につながってくればいいなと思っています。

スポーツ指導者のリーダーとして

米倉: サッカー教室を開催されたりするということですが、スポーツの指導法ということについて、最近、高校の部活で不幸な事件が起こったり、女子柔道トップチームの中でも体罰が行われていたというような話がありました。体罰は悪いことで、それは多くの人がわかっていると思いますけれども、トップアスリートだった中山さんは、指導方法について、どうあるべきだということをお考えですか。

中山: 「どれだけわかりやすくやることを説明できるか」ということなのかなと考えています。その練習の必要性が理解できれば、取り組む熱意もより強いものになるんじゃないでしょうか。「とにかくこれやっつけよ」という一方的なものでは選手も動かないだろうし、反発も起きるのかなと感じます。限られた時間の中なので、指導者たちは、説明する時間をもったいないと感じるのかもしれませんが…。

米倉: 女子柔道の件では、本学の山口さん（山口香准教授・体育系）が積極的に発言されていますが、他の分野のトップアスリートの声がなかなか聞えてこない感じがします。「指導というのは、メンタルを含めて科学的に、エビデンスベースでやるべきだ」といった声が、もっと出てくるかと思いましたか…。

中山: 柔道界について、僕も、テレビや新聞が報道する部分しかわかりませんから、なかなかコメントしづらいところがあります。それぞれの立場の人の意見を聞いて判断すべきことだと思いますから…。ただ、実際に殴ったのか、押しただけなのか、その辺はわからないんですけれども、「日本代表レベルでも体罰があった」ということは、驚きではないですね。僕自身は、大学や社会人、その後プロになっても、そういうことはありませんでした。大学生でそんなことをされたら、反抗したでしょうし、監督やコーチに対しても、意見を言える立場になっていました。プロになったら、なおさらです。その前段階、中・高時代には、信頼関係の上で、「殴られてもいたしかたない。自分の落ち度に対しての教育である」というのがわかっていたので、受け入れていました。

米倉: 指導者をリスペクトできていたということですね。

中山: それに対しては、なんら恨みもなく、自分を成長させてくれたと感謝している部分もあります。自分が育ってきた環境がベストとは言いませんけれど、僕自身をここまでしてくれた指導が間違いだとも思いません。もちろん、暴力したからそれで上手くなるのか、走れるようになるのか、というのとはまた別だとは思いますが…。

米倉: 難しい問題ですね。しかし、筑波大学には、スポーツ界のリーダーを育成する機能があります。日本のスポーツ界のリーダーたるところで、筑波大学はこの問題に対して、積極的に、いろいろな意見や情報を発信していくべきだと思います。

金メダルとノーベル賞の大学

米倉: スポーツ界での本学の活躍についてお話をしてきましたが、筑波大学のことを海外の方に説明する時に、一番受けるフレーズは、「ノーベル賞と金メダルの大学」です。両方を持っている大学ってなかなかないので、海外でも強くアピールできるのです。



中山:なるほど。でも、僕は、両方ともに属していないですから、なんか、悔しいですね(笑)。僕が属するものを、そこに、もうひとフレーズ加えたい…「ノーベル賞と金メダル、ギネスにワールドカップ」というのはどうでしょう(笑)。

米倉:それはいいですね(笑)。中山さんは、ワールドカップ本大会日本代表初ゴールや2つのギネス記録など、輝かしい記録をお持ちです。去年の12月に、サッカーの第一線から退かれるとご決断されましたけれど、今後のことについては、どのようにお考えですか？

中山:いろいろなところから、いろいろなお話をいただいているので、今は、その中から自分が情熱を傾けられるものは何かを探している状態です。もちろん、ここまでサッカーをやってきましたし、サッカーを愛していますし、サッカーに携わる仕事に就きたい、そこに身を投じたいという気持ちはあります。

米倉:何か具体的に決めていることは…。

中山:コーチライセンスは取りたいと思っています。今持っているのは、C級なので、B、A、Sと…。S級を取るとJリーグの監督になれるので、そこまで取れたらいいなと思っています。今は、解説をする時に、プレーヤー目線で、僕が感じたものを言っているのですが、コーチライセンスを取る勉強することで、解説するにしても、コメントに深みを持たせられるかもしれないなと



「チャリティサッカー 2012」でゴールを決める中山選手 写真:報知新聞 / アフロ

思いますし。コーチライセンスを取って行く段階で、指導というものにすごく興味がわき、そちらの方向に情熱が向いていったなら、指導者の道にいくのもいいだろうし…。

米倉:これからのご活躍を期待しています。最後になりましたが、本学学生へのメッセージをお願いします。

中山:やらされるんじゃなく、自立して、自分の信じる道を進んで行ってもらいたいと思います。ただし、その中には

間違いもあるだろうから、そういう時に助言してくれる人にも耳を傾けてもらいたい。助言してくれる、いろんな経験者がいるのが、筑波大学ですから。自分だけの思いで突っ走るのではなく、助言を受け入れ、それを自分の中で消化して、必要であれば行動し、吟味した上で自分には必要がないと思ったら行動に移さないという、ひと手間を加えてもらいたいと思います。

米倉:どうもありがとうございました。

● 対談を終えてまだまだ続くサッカー談議 ●

米倉:新しく学長になられた永田恭介先生も、とてもサッカーが好きです。永田先生が、サッカーで一番憧れた選手は、バルデラマ(カルロス・バルデラマ/コロンビア)なんですよ。

中山:バルデラマですか。コアですね！

米倉:私は、クライフ(ヨハン・クライフ/オランダ)とかベッケンバウアー(フランツ・ベッケンバウアー/ドイツ)なんです。バルデラマと聞いた時には、驚きました。

中山:普通は、世界のベスト4とか、そういうところで活躍している、キャプテンシーのある、エース級の選手を思いがちですけどね。まあ、バルデラマもコロンビアの英雄ではありますけれども。

米倉:そして、永田先生は、クライフより、ニースケンス(ヨハン・ニースケンス/オランダ)だということです。

中山:ニースケンス…。

米倉:中山さんはどなたですか。

中山:僕はパオロ・ロッシ(イタリア)です。あとは、ファン・バステン(マルコ・ファン・バステン/オランダ)とかね。

米倉:ああっ…。

中山:やっぱりあれだけ高さ(身長188cm)があって、器用な選手はいないですよ。

米倉:今まで私が一番すごいと思ったのは、ファン・バステンの、1988年のヨーロッパ選手権決勝でのゴールです。

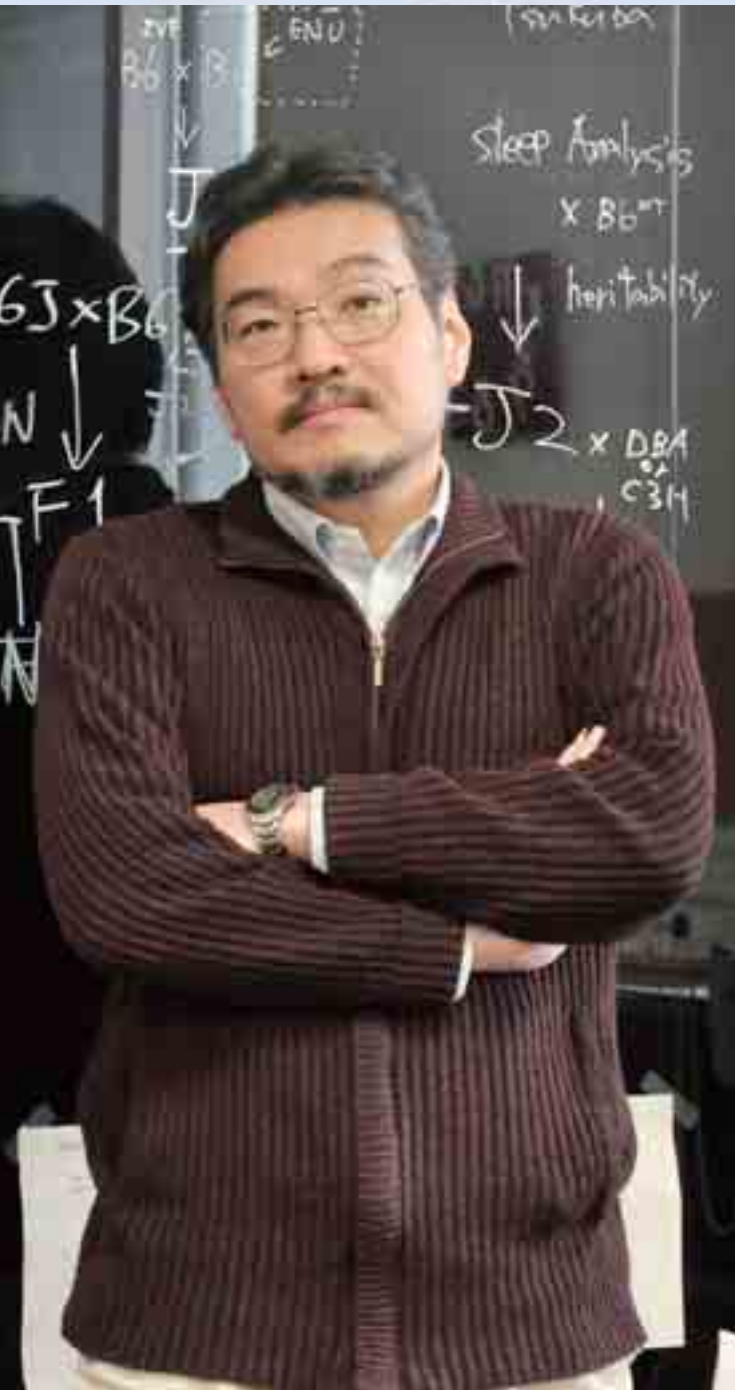
中山:ヨーロッパ選手権の決勝ですか。あの後方からのボールをダイレクトボレーで、ダサエフ(リナト・ダサエフ/ソビエト連邦)の上をこう…ドライブがかかっていて、サイドネットですよ。

米倉:あれは信じられないゴールでした。

中山:あのゴールはすごかったです。

米倉:話が止まりませんね(笑)。今日は、東京キャンパス文京校舎に来ていただきましたが、次回は、ぜひ筑波に来ていただいて、学長ともお話ししていただきたいです。

※本対談は2013年2月に行われました。



やなぎ さわ
柳 沢

まさ し
正 史 教授(医学医療系)

国際統合睡眠医科学研究機構長

- 1960年 東京都 生まれ
- 1985年 筑波大学医学専門学群 卒業
- 1988年 〃 大学院基礎医学系博士課程 修了(医学博士)
- 1989年 〃 基礎医学系薬理学 講師
- 1991年 テキサス大学サウスウェスタン医学センター准教授 兼
ハワードヒューズ医学研究所研究員
- 2001年 独立行政法人科学技術振興機構(JST/ERATO)
柳沢オーファン受容体プロジェクト 総括責任者
- 2010年 筑波大学大学院人間総合科学研究科
分子行動科学研究コア教授 兼任
内閣府 最先端研究開発支援プログラム(FIRST)
高次精神活動の分子基盤解明とその制御法の開発 中心研究者
- 2012年 文部科学省 世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)
国際統合睡眠医科学研究機構長

世界初の睡眠基礎研究拠点

た、うつ病やアルツハイマー病など、睡眠障害が主要な兆候として現われる疾患も少なくありません。しかしほとんどの場合、睡眠薬の処方や生活指導など、対症療法的な治療にとどまっているのが現状です。睡眠のメカニズムがわかれば、副作用や依存性のない新しいタイプの睡眠薬開発につながり、睡眠障害に対する医学的な対処方法が多様化し、さまざまな疾患の治療も可能になります。

昨年末、筑波大学に新たに設置された国際統合睡眠医科学研究機構は、睡眠のメカニズムを探る基礎研究を行う世界初の研究拠点です。世界中から優秀な人材を集め、トップレベルの研究を進める

仮説のない科学

睡眠のメカニズムを探る研究には仮説がありません。仮説をたてられないほ

体制を整えつつあります。化学・生物学・創薬などの分野も積極的に取り入れ、医療域が融合した研究分野を確立し、最終的には総勢200名近い研究者やスタッフを抱える予定です。

またここでは、研究はもちろんのこと、運営や人事などのプロセスの面で、旧来の大学のルールにとらわれない新しいシステムの構築にもチャレンジしています。すでに、教員数や報酬の決め方、職位によらないフラットな組織づくりなどに取り組んでいて、この点でも大学にとつて良い前例になると考えています。

ど見当のつかない探索を行う分野なのです。ですから、睡眠は遺伝的に規定されているはずだという前提だけを頼りに、フォーワード・ジェネティクスという研究手法を使って根気よく網羅的にスクリーニングするしかありません。それにはまず、睡眠異常(眠りすぎや眠らないなど)のミュータント(突然変異個体)をつくり出します。ランダムに突然変異させたマウスを大量につくり、その中から睡眠異常の個体を見つけ出して、その原因遺伝子を突き止めます。このようなミュータントが発生するのは数千匹に1匹ぐらいの確率ですから、これは気の遠くなるような作業です。けれども、いったん何かが見つかれば、それを足がかりに次々と新しい発見が得られる可能性を秘めています。

睡眠のメカニズム解明前夜

しかし実際に、こういったデータ先行型のスクリーニング研究を行うのは、研究者としてとても勇気のいることです。何年も成果が出ないこともあり得るし、資金や人手もかかります。世界的にも睡眠の基礎研究に携わる人が少ないのはそのためでもあります。ですから、WPIのような特別な機会を与えられたことは大きなチャンスなのです。もちろん、成果に対する厳しい評価も受けませんが、それ以上に、睡眠の謎が一举に解明される夜明け前のような、大きな期待感があります。何もわかっていない、曖昧模糊としていることが、現在の睡眠研究の最大の魅力です。

聴

柳沢 正史 教授（医学医療系）

「なぜ眠るのか」

その謎が解ける夜明け前の予感

「眠る」というのはあらゆる動物に共通の行動ですが、睡眠の機能や制御のしくみは、実はまだ何もわかっていません。睡眠メカニズムの解明は、不眠症や睡眠時無呼吸症候群など睡眠障害の根本的治療への道を拓きます。文部科学省の「世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）」に採択され、昨年12月に設置された国際統合睡眠医科学研究機構を率いる睡眠科学の第一人者、柳沢正史教授にお話を伺いました。

睡眠はわからないことだらけ

睡眠は、健康な状態のままで意識を失い活動を停止する可逆的なプロセスです。これに相当する行動は、哺乳類や鳥類だけでなく、魚類や爬虫類、昆虫にもあります。眠っている間、その生物は完全に非生産的で、食糧を調達することはおろか、身を守ることもさえできなくなります。非常にリスクな状態ですから、進化論的にはそのような行為は無い方が有利なように思われます。なのに、睡眠をとらない種は存在しません。大きなリスクにもまして、1日のうちの数時間、意識を失うに値する利点があるはず

です。例えば、楽器演奏などで長時間練習してもできなかったことが、一度寝て起きるとできるようになっていたりします。それに類した経験は誰にでもあるはずで、睡眠が知識・スキル・エピソードなどの記憶強化に何かしらの関与をしていることは認められています。しかしほぼすべての動物に共通する行動として、睡眠がどのような機能のために保存されているのか、全くわかっていません。

また、眠気、睡眠の量や深さがどのように制御されているかも完全なブラックボックスです。眠らなければ眠くなるし、長く眠っても毎日ほぼ一定の時間帯に再び眠くなります。一方で、非常事態

や興奮状態の時には一時的に眠気が消えたりもします。このように、ホメオスタティック（環境の変化に関わらず生体の状態を一定に保つ）、概日周期的、情動的な制御などが睡眠にあることは、表面的な現象としてはよく知られています。しかし、それらが脳の中でどのように表現されているかは、実は何も解明されていないのです。

オレキシンの発見で睡眠研究へ

そもそも睡眠研究へ進むきっかけとなったのは、オレキシンという神経伝達物質を偶然、発見したことです。その時

点でオレキシンの機能は全く不明でした。やがて、オレキシンをつくれないマウスがナルコレプシーという睡眠疾患になることがわかりました。睡眠と覚醒のスイッチングがたったひとつの遺伝子異常でうまくいけなくなってしまうのです。これは睡眠科学における大きな進展でした。

これまでの睡眠研究は、主に臨床ベースで進んできました。睡眠がうまくいかないと、昼間の活動に影響するだけでなく、高血圧や脳卒中などのリスクにもなります。不眠に悩まされている人は多いですし、最近は睡眠時無呼吸症候群が注目され、睡眠専門医も増えています。ま



NHK「サタデースポーツ」「サンデースポーツ」のキャスターとしてご活躍の松尾剛さん。今回は、「第二学群農林学類出身で、5年回り道してNHKに入局」というユニークな経歴をお持ちの松尾さんにお話を伺いました。

まつ お つよし
松尾 剛 さん
NHKアナウンサー

1967年 長崎県生まれ
1992年 筑波大学第二学群農林学類卒業
1995年 NHK入局
2011年～ 「サタデースポーツ」「サンデースポーツ」キャスター



— 本学に入学された理由から聞かせてください。

高校時代から、ちょっとだけ変わったことが好きだったんですよね。髪の毛も、肩ぐらいまで伸ばしてみたり、おかっぱにしてみたりだとか。筑波大のパンフレットを見た時に、枠とか従来の伝統にとらわれない、というイメージを受けて、自分に合っているんじゃないかなと選びました。まあ、行ってみたら、なんとなく休んじゃったんですけれど(笑)。1年間で大学に行ったのが9日だけという年もあったんですよ。しかも、そのうち4日は学食だけ(笑)。その年は休学扱いになりました。アルバイトと、いろいろなサークル活動ばかりしていましたね。

— 6年で大学を卒業された後、NHKに入局されるまでの3年間は、どのように過ごしていたのですか？

6年目の3月30日に卒業できることが決まりました。だから、卒業式にも出られなかった(笑)。卒業できるかどうかわからないから、就職活動もしていないわ

けですよ。そこで、「ちょっと英語でも勉強するか」と、その年の9月から1年間、ワーキングホリデーでカナダに行きました。学生時代から、漠然と、しゃべる仕事がしたいなどは考えていたんですが、帰国後、「しゃべる仕事の中でも、アナウンサーという仕事を志してみよう」と決心して、マスコミ就職読本を開いたら、その年の入社試験は終わっていたんです。それで、さらに1年浪人して、NHKを受けました。NHKだけ年齢制限が「入社時27歳」だったので、ぎりぎり受験できましたが、他は受けられなかったんですよ。

— 1社だけを狙って浪人する勇気も、見事に採用されたことも、すごいですね。その間、アナウンサーになるための準備はされたのですか？

筆記試験の勉強はしました。アナウンサー学校にも3ヶ月ほど通いましたが、紹介してもらったNHKアナウンサーに、「NHKは素人っぽい人が好きだからやめた方がいい」と言われてやめました。NHK

は採用枠が大きく、当時はアナウンサーだけで20人くらい採用していたんです。だから、ちょっとした隙間にもぐりこむところはあるかなと思って受けたら、もぐりこめました(笑)。

— アナウンサーとしてのスタートはどのような感じでしたか？

初任地は宮崎で、生中継をたくさんやりました。とにかく失敗が多くて、3分間の生中継で、頭が真っ白になって30秒しかしゃべらなかつたり、8分間やっちゃたり。きちんとできなかったんです。僕は、それがいけないものだとずっと思い続けていて、一生懸命きちんとやろうとするんですけど、絶対できないんですね。ところが、ある時先輩に、「ちゃんとできないところが面白い」と言われて…。確かに、生中継で、決められたものが順番に出てくるより、突然ハプニングが起きて、そこでみんながびっくりしてたりするのが面白かったりするじゃないですか。「ああ、そういう考え方もあるんだなあ」と気がついて。それ以来、きちんとやること

よりも、「常識を超えたところに面白さがあるはずだから、おまえの常識を疑って、おまえの常識を超えるものを探してこい」って、自分に言い聞かせて仕事をするようにしています。

— その後、主に報道の仕事がされてきましたが、2年前からスポーツ番組のメインキャスターになられました。

スポーツの仕事をしていて得ることは、いろんな放送の仕事に通じるところも多くて、足腰が鍛えられていると思います。視聴者には、それぞれの競技に、僕よりもはるかに詳しい人たちが大勢いらっしゃるわけですね。そういう方たち全ての人を満足させようと思うと、ただスポーツを見ているだけじゃだめなんです。だから、一生懸命勉強して、情報を得て、さらに、見ている人が期待しているであろうことを想像しながら放送していくという、放送人としての基本動作を毎日繰り返している感じがします。

— スポーツ番組において特に心掛けていることはありますか？

スポーツ番組には、「今活躍しているあの選手は、ある瞬間に壁を乗り越えた。そのためにこういう努力をした」というような、観る人が共感して、自分の心を高めていける情報が求められていると思うんです。多くの人たちの精神が豊かになるようなものを見出して、提供していきたいですね。

— ロンドンオリンピックの時には、NHKのオリンピックの顔として大活躍されましたが、競技数が多くて大変だったのではないのでしょうか？

なんでこんなにいろんな競技があるんだろうと、ちょっとうらめしく思いました(笑)。いろいろな種目で日本選手が活躍してくれて、それぞれの競技をじっくり観ることができたという意味では、ものすごく楽しかったんですけど。体力的にもきつかったです。放送は、夕方6～7時から夜中の1～2時くらいまでですが、朝6時くらいに終わる最終競技まで中継を観るんです。それから、家に帰って昼まで寝て、2時くらいから打ち合わせをして、また夜に向かうというような生活が20日間。最後の方はずっと時差ぼけしているみたいな状態になりました。

— プロ野球のキャンプの取材もお忙しいかと思いますが？

取材が一番多いのは、プロ野球のキャンプの時期です。キャンプでは、コーチや選手との距離が近くなるんです。シーズン中は、声かけにくい雰囲気だった選手が、気さくに話をしてくれたり…。その人の人となりみたいなものを感じられるし、この時期は本当にありがたいです。取材の時には、選手の情報がたくさんあるに越したことはないので、実況アナウンサーなど、詳しい情報を持っている人たちに教えてもらいながら、知識を一生懸命入れて行きます。顔と名前だけじゃなくて、そこまでの経歴や、誰の指導を受けていたかとか、誰と仲がいいとか…知れば知るほど面白いんですよ。「あっ、高校の後輩と先輩の対決だ～」みたいなのが見えたりすると、楽しいでしょう。

— 最後に、本学の学生にメッセージをお願いします。

他の人と、行動は同じでもいいんですけど、考え方であったりとか、物の見方だったりとかが少し違うと、何かのチームに入った時に、役に立ちます。ですから、その蓄積をたくさん持っていた方が、どの職場に行っても活躍できると思うんです。学生時代に、そういうものを蓄積する時間が取れるといいですね。

— どうすれば、他の人と違う考え方や物の見方を蓄積することができるのでしょうか？

自分と違う考えの人と話をして、その人の考えに触れるとか、本を読んだりとか、いろいろなアルバイトをするとか。てっとり早いのは、海外など、今いるところと、違う環境に行くことです。そうすると、常識を疑い始めますから。僕は、カナダに1年間行って、「環境が違えば自分の考え方が通用しない」ということをいろいろ経験しました。たくさん遠回りしましたが、人生無駄なことはないと思っています。



つくばキャンパスは、東西約1km、南北約4kmの自然に恵まれた広大なキャンパスで、東京ディズニーランドと東京ディズニーシーを合わせた面積の約2.4倍の広さを誇ります。広いキャンパスには様々な教育・研究組織がありますが、全てを知ることはなかなかできません。その組織や施設が、どのような目的で設置され、どのようなことをしているのかなど、各号で紹介していきます。

プラズマ研究センター

Plasma Research Center

Introduce

プラズマ研究センターは、1979年に設立され、世界最大のタンデム・ミラー型核融合実験装置であるガンマ10が建設されました。現在でも世界が注目するユニークな装置で、人類の究極のエネルギーである「プラズマ核融合エネルギー」の最先端の研究とそれを通じた人材育成に取り組んでいます。

市村 真 センター長



プラズマ核融合は安全で 環境負荷の少ないエネルギー

そもそもプラズマとはいったい何でしょう。

「プラズマというのは、固体、液体、気体に続く物質の第四の状態などと言われ、物質の高温の状態を言いますが、その典型的なものが太陽です。太陽がなぜ高温で輝いているのかというと、太陽の中で高温のプラズマが反応して核融合が行われているからです。いわゆる原子力発電では『核分裂』のエネルギーを利用していますが、軽い原子核同士が融合してより重い原子核になるときに発生する大きなエネルギーを利用し、高温の核融合エネルギーを実現しようというのがプラズマ核融合炉の研究です。そして数億度という高温のプラズマを実現した場合、それを閉じ込めておく『常温の壁』を両立させる必要があります。

ます。『数億度のプラズマと常温の壁を両立させる理工学』と呼んでいます。が、この壁を守る研究が非常に重要な課題なのです」(今井剛前プラズマ研究センター長)

一昨年の東日本大震災と福島原発事故以降、将来のエネルギーの課題で、このプラズマ核融合が具体的な話題に上ってこないのは、現在の研究が、直ちに実用化できるという技術ではないからです。しかしエネルギーの問題は人類にとって基盤となるものなので、20年～30年先、さらに100年、200年先のことを考えて研究を続けています。核融合も原発と同じではないかという見方もありますが、核融合はCO₂を発生しない環境にやさしい技術であり、燃料は海水から取り出すことができ、少量の燃料で膨大なエネルギーを生み出せるという利点があります。また原発のような高レベルの核廃棄物を生み出すということがなく

安全性も高い。また核融合炉は、ガスコンロと同じように燃やす分だけその都度外部から補給し、供給を止めれば核融合反応も止まるため、暴走するということもありません。

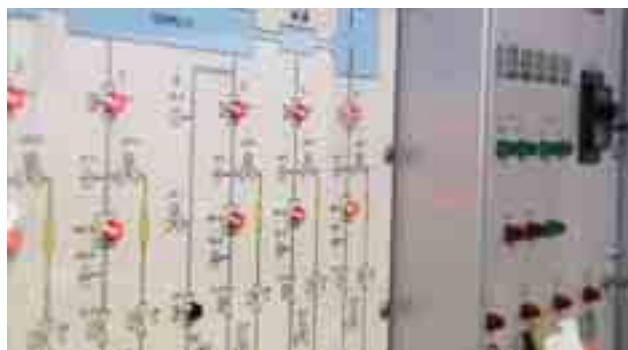
世界最大級の巨大装置を持ち、 共同利用・共同研究の拠点

プラズマ研究センターは、「タンデム・ミラー型核融合プラズマ実験装置」(GAMMA10、ガンマ10)と呼ばれる、全長27メートルの、同方式では世界最大級の巨大な装置を有しています。(写真1)

1983年に、ガンマ10によるプラズマ実験を開始し、核融合炉に必要な1億度を超す高温プラズマの生成に成功しました。その後、トカマクというドーナツ型の環状装置が、より効率が良さそうだということで、2004年頃から日、欧、米、露、韓、中、印などの国際



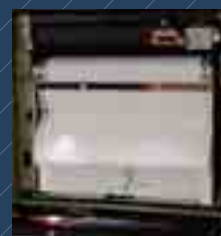
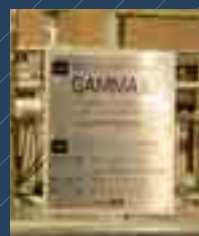
▲運転制御室



▲真空排気システムパネル



GAMMA 10 (写真1)



▲真空度記録計



的な連携で核融合の実験炉(ITER: イーター)の建設が進んでおり、その実験が始まるのが10年後ぐらいで、それが成功すれば実際に発電するところに進んでいきます。

大学にあるこうした研究機関としては、本学以外に、京都大学(HeliotronJ)、九州大学(QUEST)、大阪大学などにもそれぞれ独自の研究装置があり、各大学の研究センターと岐阜県にある自然科学研究機構の核融合科学研究所を中心に、全国の大学が連携・協力していく『双方向型共同研究』という、システムの共同利用の施設としても機能しています。

こうした国内外の共同研究のなかで、本学は国際的に高い評価を得ています。

昨年、核融合のオリンピックとも言えるIAEA(国際原子力機関)が主催する核融合の国際会議で、本センターの新しい研究の展開が詳しく紹介さ

れ、非常に高い評価を得ており、加熱装置に使われているジャイロトロンという、波長が極めて短いマイクロ波管の開発・研究でも世界的に注目されています。これを使って自然科学研究機構のLHDという装置では、約2億度のプラズマを実現しました。

長丁場の研究を受け継ぐ人材の育成

長丁場の研究を継続し発展させるためには、研究を引き継ぐ人材の育成が不可欠。市村真プラズマ研究センター長は、「そのためには、研究の裾野を広げなければなりません。ここで研究する大学生、大学院生全員が、核融合の研究施設に就職するわけではありませんが、プラズマ核融合の知識を持ってさまざまな企業や機関で活躍してもらい、プラズマがさまざまな形で人類の役に立つということを広め

てもらいたい。そういう人材を育てていきたいと思っています」と抱負を語ってくれました。同センターは、常に40～50名の学生が、教育を受けながら教員と一緒に研究も進めており、これまで数多くの有望な人材を輩出しています。

「高校生をはじめ中学生や父母の方々に、当センターが保有するこの世界最大級の装置を間近に見て実感してもらえよう随時見学を受け付けています。見るだけでもその迫力を感じてもらえるはず」と、市村センター長は、語っています。(要連絡。HP参照 <http://www.prc.tsukuba.ac.jp/wp/>)

附属学校の 名物先生登場！ 9

本学には、東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県に11校の附属学校があり、いずれもそれぞれの分野でわが国の教育をリードしています。そこには、全国でも有名な先生たちが大勢います。このコーナーでは、各学校の名物先生を順次紹介しています。

今回の先生

筑波大学附属高等学校

お ざわ さとし
小澤 啓 教諭

Profile

横浜国立大学大学院教育学研究科修了後、神奈川県立鶴見養護学校を経て、1999年より附属高等学校教諭。横浜物理サークルや科学教育研究協議会での活動を中心に、授業研究に取り組む



本学附属高校で物理を教える小澤啓先生の授業は、物理実験室に座る生徒たちが、一風変わった座席の配列で授業を受けている。

実験室といえば、通常は、生徒たちがいくつかのグループに分かれ、一斉に同じ方向（黒板）に向かって座るか、実験用の机を囲むように座る。ところが、小澤先生の授業では、3～4人が一組となって、全体が8グループに別れ、4グループずつが対面する形で座席が配列されている（図1）。小澤先生は教壇にある黒板を使わず、生徒たちが対面する中央にホワイトボードを設置し、そのホワイトボードの前で、授業を始めるのだ。

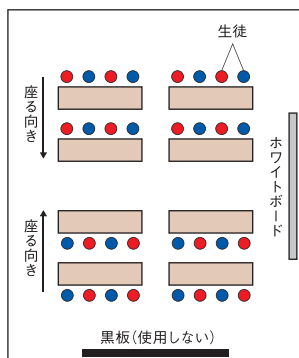
「ある時から、授業では、生徒同士の話し合い、学び合いを組織したいと考えようになったんです。物理講義室のように階段式の教室では、生徒が一斉に黒板に向かって座るような形で、どうしても生徒と教師間の問答のような授業になってしまいます。生徒が対面した座席にする方がいいんです」

生徒同士が互いの意見を話し合うために対面式の座席にしてからは、生徒が発言する時は起立させ、他の生徒たちに向かって発言するように促した。しかし、最初はどうしても生徒が教師に向かって話してしまう。そんな時、小澤先生は、自身が生徒の視界に入らないよ

う、生徒の後方に隠れるよう回り込む。すると生徒たちは、どうしても生徒全体に向けて話をするしかなくなるのだ。

小澤先生は、授業のあらゆる状況のなかで、生徒の後方や背面にいる。自分の考えをノートにまとめている時、生徒同士で意見を出し合っている時、実験している時…、小澤先生は時には少し離れたところから、時にはすぐ後ろから覗き込むように、生徒の様子を見つめている。

小澤先生も、以前は授業がうまくいかないと思悩む事が多かったと言う。「大学時代から続けている実験サークルがあるんですが、そこで学んだ演示実験を、豊富に見せる事を心がけて授業をしている時期がありました。でも、授業はうまくいきませんでした。生徒がこちらの思うように理解してくれない。演示実験を題材に発問をしても、なかなか答えてくれない。『どう思う？』と聞いても適当に答えて、理由は『何となく』。授業が生き生きとしなかったんです。生徒たちに考えさせる授業をしたいと思悩んでいました。そんな時、故玉田氏の授業スタイルを継続して研究している仲間と出会ったんです」



（図1）物理実験室での座席配置 生徒は中央に向かって対面式に座る。そのため黒板は使用せず、その代わりに中央に配されたホワイトボードを使用する。各机毎に男子生徒、女子生徒が交互もしくは均等に割り振られている。



玉田泰太郎氏(1927～2002年)とは、理科や科学の授業づくりを研究・実践し、その成果を講演会・研究会などで広く伝えてきた人物。その遺志を受け継いだ教育者たちが、現在も実践的な研究活動をしている。小澤先生は、「科学教育研究協議会埼玉支部」で活動する事で、玉田氏のエッセンスを吸収していった。そうして、試行錯誤の結果、現在の授業スタイルに辿り着いたのだった。

小澤先生の授業の特徴は、生徒の座席の配置だけではない。「進行手順」や「ノートの活用」もそうだ。

「進行手順」は、①〈課題〉を出す②〈課題〉について質問を受ける③〈自分の考え〉をノートに書かせる④最初の〈予想〉分布を調べる⑤討論させる⑥再び〈予想〉分布を調べる⑦実験を見せて〈実験して明らかになったこと〉をノートに書かせる⑧〈実験して明らかになったこと〉を発表させる⑨ノートを回収する、という段階で進める。この手順は、ほと

んど毎回共通させてルーティンとなっている。

これによって、説明や演示が中心となっていた授業から、生徒たちが自ら考え、討論し、実験し、それを記録し、さらに考えを深めるという生徒の主体的な授業へと変化させた。「こちらが面白い実験を見せようとか、わかりやすい説明をしようとか工夫しているつもりでも、生徒たちは受け身になってしまって、次第に面白い事を待たせてしまうんです。『うまく教える』のではなくて、『うまく学ばせる』って考えることで、この授業スタイルになっていきました」

生徒から回収したノートは、必ず次の授業までに目を通す。「ノートを見れば、生徒が授業でどこまで理解できたかわかります。もし多くの生徒の理解が不十分であれば、それは私の授業がうまくいかなかったということです」と語る。「授業では、できるだけ私が説明する時

間を少なくしたいんです。生徒にじっくりと考えさせて、話し合わせたい。生徒がノートに書いている時に後ろから覗き込むのも、それぞれの生徒がどんな考え方をしているか確認して、生徒たちの話し合いがうまく進むようにサポートするためです。生徒たちが学び合うために、私が視界からなくなる方がいい時は、すぐに後ろへ下がるようにしています」

そう言って生徒たちの後ろ姿を見守る小澤先生。本校に赴任する以前は、障害児教育を実践してきた。そんな小澤先生に、教師として生徒に対するスタンスを訪ねたところ、視覚障害児の手を引く際、腕を上から掴むのではなく、下から手を添える事に例えた。「ギュッと腕を掴んで引っ張るのではなくて、下から手を添えるように、そっと生徒の背中を後押ししてあげるような、教育ってそういうイメージではないでしょうか」



妻木 貴雄 副校長

小澤先生の授業は、少し変わっています。最初に生徒全員に課題を出し、考えさせます。次に、予想分布をとり、迷っている生徒、少数意見の生徒から順次考えを発表させ、討論させます。この段階で考えを変える生徒もいます。再度予想分布を取ってから、最後に実験で決着をつけます。実験には先生が自作した器具や装置がたくさん出ています。

科学は“巨人の肩に乗って”(先人の科学者が構築した理論をもとにして)世界を見ていく学問です。そのため、理科の授業はどうしても理論の説明に偏りがちです。しかし、小澤先生の授業は、説明は最小限にして、生徒が考え、議論をし、学びあう場を提供しています。その意味で、生徒の自主性を生かした大変ユニークな授業といえるでしょう。

全日本インカレ優勝！ 挑戦者として4冠を目指す



平成24年度全日本バレーボール大学男子選手権大会(インカレ)で、7年ぶり9回目の日本一に輝いた男子バレーボール部。

日本一に到達するまでの正念場は、フルセットまでもつれた準々決勝の日体大戦だった。試合の前半で、エース出畠田敬選手(体育専門学群3年)のふくらはぎが、両足ともつってしまうというアクシデントもあり、チームのムードが停滞した。

「足がつった出畠田は替えず、思い切って、控えのセッターの矢野諒介(体育専門学群4年)を出しました。キャプテンでありながら控えである彼は、秋頃、自分が何をすべきか、すごく悩んでいたんです。それで、「攻撃パターンを含めて、正セッターの前田一誠(体育専門学群3年)と違うタイプのセッターとして準備しておいてくれ」と伝えました。彼は、しっかり準備しておいてくれて、うまく攻撃を組み立ててくれました。矢野の活躍

がなかったら、厳しかったと思います」(秋山央監督)。

“立っているだけで相手に脅威を与える”出畠田選手も、痛みに耐えながら、最後までコートで戦い抜いた。「4年生を日本一にしたいと、チームの気持ちが一いつになっていました」と、久原大輝新キャプテン(体育専門学群3年)。

今季は、春季・秋季リーグ2位、東日本インカレ3位。実力はありながらも、全日本インカレまで頂点に立てなかった。秋山監督は、「優勝するには、3年生以下が、4年生を勝たせたいと強く思って、チーム全員で結束することが必要」と考え、秋以降は、そのための取り組みや練習に重点を置いたという。「インカレに臨む前は、練習の中でも、4年生を勝たせようという雰囲気ができたので、これは勝てるという自信がありました」。

日本代表の出畠田選手が、「代表で集まってやる練習より、筑波大の練習の方がしまっている」と語る中身の濃

い練習も同部の強さの秘訣だ。

「練習はきついと思いますが、それには理由があります。競技スポーツでは、接戦や劣勢といった、自分にとって思わしくない状況で力を発揮できるかどうか重要です。練習の中で、疲労や疲れや痛み、練習の飽きや練習に対する嫌悪感といったマイナスの状況をあえてつくり、それを毎日乗り越えていくことで、本番の劣勢な状況でも立ち向かえるようになると思うんです。面白い練習や、早く上手くなる合理的な練習もあるでしょうが、そればかりではうまくいきません。今は、震災の影響で1日2時間しか練習ができませんから、その2時間の中で、身体的ストレスと精神的ストレスをどれだけかけるかのバランスを考えています」と、秋山監督。



秋山央監督



そんな練習に対して、「優勝を目指すには、それなりの練習をして当たり前。きいつとは思わない」と、久原主将、前田副将、出未田選手は口を揃えてきっぱり。春季リーグ開幕を前に、「インカレで優勝したのは去年のことで、今年は今年。去年よりさらに上に行くために、各自が挑戦する気持ちを持つことが大事だと思っている」と、気を引き締め、「挑戦～飽くなき向上心」というスローガンを掲げて、春・秋季リーグ、東日本インカレ、全日本インカレの4冠を目指す。

※学年は、2013年3月現在



Information

前身の師範学校から140年を超える歴史を有し、オリンピックの金メダリストを始め、優秀な選手を多数輩出している本学の体育会。主な競技成績および今後の試合日程を紹介しますので、是非、各フィールドに足を運び、熱き声援を送ってください。

【つくばスポーツ ONLINE】

<http://www.sports.tsukuba.ac.jp>

【筑波大学体育会】

<http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~taikukai/>

男子バレーボール部 / 女子バレーボール部

2013年度春季関東大学バレーボールリーグ戦

4/13～5/26 早稲田大学戸山キャンパス記念堂他

ラグビー部

■ **第49回全国大学ラグビーフットボール選手権大会 準優勝** (国立大初)

第14回東日本大学セブンズラグビーフットボール大会

4/21 秩父宮ラグビー場

女子バスケットボール部

■ **第79回全日本総合バスケットボール選手権大会(女子) ベスト8**

柔道部

■ **2013柔道ベルギー国際大会(男子)**

【男子90^{kg}級】**優勝** 小林悠輔 (体育専門学群1年)

■ **柔道グランドスラム・パリ(フランス)**

【女子78^{kg}級】準優勝 緒方亜香里 (同4年)

■ **2013年柔道ヨーロッパオープン・トビリシ(グルジア)**

【男子81^{kg}級】準優勝 永瀬貴規 (同1年)

■ **2013年柔道ヨーロッパオープン・ブダペスト(ハンガリー)**

【男子73^{kg}級】**優勝** 西山雄希 (同3年)

第27回皇后盃全日本女子選手権大会

4/21 横浜文化体育館

平成25年全日本柔道選手権大会

4/29 日本武道館

平成25年全日本選抜体重別選手権大会

5/11、12 福岡国際センター

テニス部

第3回筑波大学国際テニストーナメント

3/30～4/7 本学他

硬式野球部

2013首都大学野球春季リーグ戦

4/13～5/26 平塚球場他

進歩の達成感 × 人を楽しませる喜び



創部6年目となるジャグリングサークル「Sheep」。石の広場の片隅で、熱心に練習する彼らを見かけたことがある人は多いのではないだろうか。

数人でスタートした「Sheep」のメンバーは着々と増加し、現在は24人。2012年度には、大学会館で初の春季公演も開催した。

ジャグリングとは、大道芸のこと。ヨーヨー、ルービックキューブ、ペン回しなど、観客を楽しませることができれば、使用する道具に決まりはない。しかしながら、ジャグリングの基本といえ、お手玉のように、3つ以上のボールを操る「ボール」やお椀を2つつけたような

コマを、糸で回転をつけて操る「ディアボロ」など。新入生は、いくつかの基本のジャグリングを体験し、自分に合いそうな道具を1つ選んで練習を開始する。

「新入生のほとんどは初心者。新入生歓迎祭の舞台を見て入ってくる人が多いです。不器用な人でも、楽しいと思えば、必ずできるようになりますよ」と、林高広副代表（人間学群心理学類3年）。

活動は、毎週月・木曜日の18時半～21時（3A202教室）。大院生の初代代表など、OG・OBがよく顔を出して、手本を見



林高広副代表

せてくれたり、木曜の練習では、顧問の木下保准教授（数理物質系）が、一人一人のパフォーマンスにアドバイスしてくれる。

一種類のジャグリングができるようになったら、その道具の次のステップに進むのもよし、違う道具に挑戦するのもよし。林さんは、「ボール」3つを操ることからスタートし、今は、「ボール」5つを操ることや、「リング」に挑戦している。

「ジャグリングの魅力は、できなかった技ができるようになること。ステップアップする度に達成感が得られます。やっていて一番楽しい瞬間は、舞台をやり終えてお客さんが喜んでくれた時

Information

筑波大学には、約40の文化系サークルが所属する「文化系サークル連合会(文サ連)」と、約30の芸術系サークルが所属する「芸術系サークル連合会(芸サ連)」という、大学公認の学生組織があります。このコーナーでは、こうした文化系・芸術系サークルによる公演や、学園祭などのイベント情報、各種表彰・コンテスト結果などをお知らせします。（詳細は下記ホームページをご参照ください）

【文化系サークル連合会】 <http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~bunsa/>

【芸術系サークル連合会】 <http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~geisa/>



と、頭の中で観客に拍手をもらいながら練習している時です」と林さん。

本番で失敗してしまうこともある。「よく失敗しますが、僕は失敗するキャラなんで、ある意味、楽です。笑顔で乗り切ります」と笑う林さんは、笑顔を大事に、楽しそうにパフォーマンスすることを心掛けている。しかし、誰もがそうなのではなく、クールに演じる人はクールに、かわいくならかわいく、統一感を持って演技することが大事なのだという。

春季公演にイベント出張 今後はいろいろなコラボ公演に挑戦！

昨年度の第一回春季公演は、初めてのホールでの演技。照明を落とし、LED

のボールを使って「ボール」のパフォーマンスをするなど、ホールでしかできない演出を工夫し、大成功を収めた。

この春季公演と学園祭が、学内での大きなパフォーマンスだが、依頼があれば、イベントなどにも出向く。現在は、週1回くらいのペースで、つくば市内のお祭りに4人前後で出向き、30分くらいのジャグリングを披露して、バルーンアートを配布することが多い。どこに行っても子どもたちの人気を集め、最近は、水戸市や行方市など遠方からも依頼されるようになってきた。

また、この2月には、ユニバーサルソランのサークル「斬桐舞」の定期公演にも出演し、斬桐舞の踊りに合わせて、

ジャグリングを披露。

「この定期公演のために1～2ヶ月間、週に1回一緒に練習して、すごく楽しかったです。今後は、今までの活動に加えて、このような、他団体とのコラボ公演に積極的に取り組んでいきたいです」と林さん。最後に、「ひとりでも楽しめるし、みんなとワイワイ楽しくやることもできます。パフォーマンスを通して、人とのつながりもできますよ」と、サークルの魅力をまとめてくれた。

次回公演予定

第2回春季公演

4/19(場所/学生会館ホール) 18:30 開演



新入生歓迎祭

各課外団体がさまざまなパフォーマンスで新歓アピール
4/8～5/31(場所/本学内)

管弦楽団

第73回定期演奏会

5/18(場所/ノバホール) 14:00開演

第29回つくば芸術祭

地域の方々との交流を目的とした芸術・文化系サークル主催のイベント
5/3～6(つくばセンター付近)

吹奏楽団

第69回定期演奏会

6/22(場所/ノバホール)

第39回やどかり祭

本学学生が、地域の方々や新入生と親睦を深める祭り
5/24、25(平砂宿舍)

第38回雙峰祭(学園祭実行委員会)(表彰)

第4回学園祭グランプリ

審査員特別賞



シディ・ブ・サイド



ジャスミンを売る男性



語学に強いチュニジア人

チュニジアの日常生活には、アラビア語とフランス語が混ざったチュニジア表現を使います。子どもたちは、学校に入ると、標準アラビア語で勉強し、3年生になるとフランス語、5年生からは英語も習います。高校生になると、さらに、もう1つ言語を選択して勉強しなければなりません。

私は、チュニジア表現、標準アラビア語、フランス語、英語、イタリア語が問題なく使えます。日本語は、ヨーロッパの言語や文法と少し違うので、苦労していますが、だいぶできるようになりました。

たいていのチュニジア人は、新しい言語を早く覚えます。チュニジアは、ローマ帝国やオスマン・トルコ、フランスなど、いろいろな支配を受けてきたので、チュニジア人にはみんな、たくさんバックグラウンドがあり、新しい言葉を覚えることに慣れているのだと思います。私の名前のバトニーニは、イタリア系の名前ですし、お母さんは、アイルランド人です。チュニジア人は、人種が混ざっているで、「チュニジア人とはこういう人」という表現はできないし、チュニジア人と外国人を分けて考えたりもしません。

ハリッサとオリーブオイル

チュニジアの料理は、オリーブオイルを使った地中海料理です。特長は、トウガラシを元に作られる「ハリッサ」というペースト状の調味料をいろいろな料

理に使うこと。レストランでは、日本のおつまみのように、料理の前に、ハリッサにオリーブオイルをかけたものが出てきて、パンにつけて食べたりします。私は毎日使っていますが、日本人にはとても辛いようです。

ラマダン（断食）の時以外は、お酒も飲みます。「チュニジアワイン」や、「ブッハ」という、いちじくのリキュールが有名です。

人生楽しく、陽気に！

チュニジア人は、とても賑やかで、遊ぶことが大好き。いつも人生を楽しんでいます。

シンボルツリーは、ジャスミン。どこの家の庭にも、ジャスミンの木があります。カフェでは、女性は、ジャスミンの花を糸でつなげたネックレスを首から下げ、男性は、花を束ねたものを耳の上につけて、香りを楽しみます。

ジャスミンの花は、白くとても清らかで、平和の象徴です。チュニジアでは、2010年12月に革命が起こりましたが、あまり被害を出さずに、たった2週間で終わらせたことを誇りにして、私たちは、ジャスミン革命と呼んでいます。

革命の後も雰囲気はあまり変わらず、みんなのんびり暮らしています。とても素敵な国なので、みなさん、ぜひ遊びに来てください。おすすめの季節は、色とりどりの花がきれいな4〜5月です。



オレンジの花





Homeland

本学には、80を超える国から、約2千人の留学生が訪れています。
このコーナーでは、本学の留学生から、出身国の自慢の場所や風景、
食べ物などを、多岐にわたって紹介していただきます。



シディ・ブ・サイド

ルクラム

チュニス

地中海

マトマタ

タタウイン

サハラ砂漠

アルジェリア

リビア

チュニジア共和国



バトニーニ スレフ

Soulef Batnini さん

所属:人間総合科学研究科 感性認知脳科学専攻
趣味:水泳



いろいろな景色が楽しめる国

チュニジアは、日本の国土の2/5ほどの国ですが、さまざまな風景があります。地中海沿岸には、美しいビーチが続き、緑豊かな北部の高原アイン・ドラハムでは、冬に雪が降ることもあります。そして、南部には、サハラ砂漠が広がっています。

私は、チュニジアの首都、チュニスの郊外のルクラムという町で育ちました。家族でよく遊びに行くのは、エル・ジェムで、春には、一面に黄色の花が咲く草原が広がる、とてもきれいなところなんです。ここには、映画「グラディエーター」を撮影した世界遺産のコロッセオ（円形闘技場）があつて、夏の夜には、クラシック・オーケストラやバンドが演奏する、エル・ジェムフェスティバルが開かれます。

私が一番好きな場所は、シディ・ブ・サイド。この街には、美しいルールがあつて、すべての建物の壁は白、窓とドアは青になっています。いい雰囲気のカフェがたくさんあつて、若者たちの人気スポットです。若者たちは仲間と、ミントティやコーヒーを飲んだり、水たばこを吸ったりして過ごします。コーヒーは、コーヒーの粉と砂糖と水を煮て作るトルココーヒー。バラやオレンジの花から抽出した「バラ水」や「オレンジ水」を入れ、香りをつけて飲みます。

日本人の観光客には、映画スターウォーズのロケ地である、タタウインやマトマタなどの南部の砂漠地帯が人気ですね。



ルクラム

ハリッサとスパイス

全国大学選手権で 国立大学初の準優勝

本学ラグビー部は、平成24年度の関東大学対抗戦グループで、帝京大学、明治大学とともに国立大学として初の優勝をしました。

その後、第49回全国大学ラグビーフットボール選手権大会に出場し、セカンドステージを順調に勝ち上がり、ファイナルステージ準決勝に進出。東海大学と対戦し、終盤に脅威の粘りを発揮して、28対26で逆転勝利を収めました。

迎えた決勝戦は、1月13日に国立競技場で行われ、4年連続の優勝を目指す帝京大学と対戦。前半10対22の劣勢で折り返し、反撃を試みますが、22対39でノーサイドの笛が吹かれました。惜しくも敗れましたが、強豪校に対し最後まで挑み続ける姿勢に、多くの声援を頂きました。

今年度こそ、国立大学初の大学日本一を目指し、ますます活躍することが期待されます。



「人間的にも日本一」を目指して

全国大学ラグビー選手権のファイナルステージ準決勝の対東海大学戦は、前半を終えて5対21と16点差の劣勢。風上に立った後半、驚異の粘りを見せ、後半27分に内田啓太主将(体育専門学群4年)のトライなどで23対21と逆転し、このまま勝利かと思った矢先の後半33分、東海大学にトライを決められ、再逆転されました。しかし、精神的に成長していた本学ラグビー部は、後半35

分に相手のリターンキックをチャージしてボール奪い、FL粕谷俊輔(同3年)が左中間に飛び込み28-26と再々逆転、後半に入って三度リードが入れ替わった接戦に終止符を打ちました。

この強さの源に、“ラグビーだけでなく人間的にも日本一になる”ことを目指して参加している、本学での社会貢献活動があります。



「エコステーションプロジェクト」参加

ラグビー部が、2010年より、部員全員で取り組んでいるのが、資源ゴミのリサイクル活動です。

本学では、学内資源ゴミのリサイクル促進と環境意識の向上をすすめるために、2010年より「エコステーションプロジェクト」を開始しました。2011年度からは、各ゴミ集積所を「ミニ・エコステーション」と位置づけ、課外活動学生団体の協力を得て、資源ゴミのリサイクル活動を実施しています。

2012年度の参加活動団体は、環境サークル・エコレンジャーや、男子バレーボール部など9団体。中でも、ラグビー部は、「エコステーションプロジェクト」開始直後から参加し、大いに貢献してきました。

ラグビー部が参加した経緯について、「2010年度のチームが、大学日本一を目指すために、“徹底”というスローガンを掲げました。そして、ラグビーだけ日本一になるのではなく、社会に貢献する活動をしたたりして、人間的にも日本一と認められるチームになろうと考え、そのための活動のひとつとして参加を決め

ました」と松下彰吾さん(体育専門学群3年 ラグビー部環境委員会委員長)。

“徹底”というスローガンを掲げる以前は惜敗が多かったラグビー部。このスローガンを掲げた年から、接戦の試合を制すようになり、ファイナルステージ準決勝のような逆転勝ちの試合も増えました。“ラグビーだけでなく人間的にも日本一になる”という高い意識が、国立大初の準優勝という輝かしい栄光への第一歩であったに違いありません。

現在、ラグビー部の担当は、体育科学系棟南側。毎週水曜日の14時から1時間程度、ペットボトルのラベルをはがして捨て、キャップとボトルを別々に回収したり、ミニ・エコステーション周辺の清掃をしたりしています。



エコステーション活動の様子

「以前は、体芸区域全体をラグビー部だけでやっていたので、毎週全学年で作業していましたが、今は、いろいろな団体と分担するようになったので、ラグビー部内に各学年2～3人ほどいる環境委員が中心となり、学年ごとに交代で作業します」(松下さん)。

資源を売却した利益の一部は、活動団体に還元され、ラグビー部は、テーピング用テープなどの支給を受けました。

現在、2013年度の参加団体を募集中。個人で関心のある方は、T-ACT「エコステーション活動に参加してみようⅢ」に参加するという方法もあります。詳細は、本学HP参照。FacebookやTwitterでも情報を発信中です。

[本学HP つくばエコシティ推進グループ]
<http://ecocity.sec.tsukuba.ac.jp/>

[Facebook]
<https://www.facebook.com/miniecostatkb?ref=hl>

[Twitter]
https://twitter.com/intent/user?screen_name=ecosta_tkb

※学年は、2013年3月現在

総合科学技術会議において本学の山海嘉之教授が「世界初医療ロボットによる未来開拓」と題したプレゼンテーションを行う

3月1日、総理大臣官邸において第107回総合科学技術会議が開催され、「成長戦略に資する事例紹介」として、人間の身体機能を補助・改善・拡張する装着型ロボットスーツHALを世界で初めて研究開発した筑波大学の山海嘉之教授(システム情報系)から「世界初医療ロボットによる未来開拓」と題したプレゼンテーションおよびロボットスーツの次世代ニューロリハ用HAL、介護支援用腰補助HAL、単関節HALなどのデモンストラレーションが行われました。

これを受けて安倍晋三内閣総理大臣からは、「ロボットスーツを利用して脳卒中患者が歩行機能を回復することができることなど、ロボットスーツHALを間近で見ることができ、メイド・イン・ジャパンの力とイノベーションによって、富を生み出すだけではなく、まさに人間が健康を取り戻す、そして豊かな人生を取り戻すことにも繋がっていくことを実感した」旨のコメントをいただきました。



総合科学技術会議の様子(山海教授のプレゼンテーション)



単関節HALの説明を受ける安倍晋三総理、菅義偉官房長官



山海教授からロボットスーツの基本原理の説明を受ける安倍総理

本学と東京都および東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会が連携協定を締結

2月28日、東京都庁において、清水一彦学長代理・副学長、真田久体育専門学群長および山口香准教授(体育系 ソウルオリンピック銅メダリスト)らが出席し、本学と東京都ならびに東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会と

の連携協定が結ばれました。

この協定により、東京高等師範学校校長でアジア人初のIOC(国際オリンピック委員会)委員、嘉納治五郎の思想研究を推進するとともに、オリンピック憲章に込められた理念を子どもたちに

伝えるオリンピック教育を附属学校とともに広く展開し、スポーツを通して世界平和の実現を目指す「オリンピック・ムーブメント」を普及させることで、オリンピック・パラリンピック招致の側面支援を行います。



左から清水一彦学長代理・副学長、山口香准教授、真田久体育専門学群長



受賞 Awards and Prizes

平成24年度いばらきイメージアップ大賞を受賞

2月6日、都道府県会館（東京都千代田区）において、茨城県民に誇りを与え、県の知名度・イメージアップに貢献した取り組みを表彰する、平成24年度いばらきイメージアップ大賞の式典があり、本学が、JAXA筑波宇宙センター、つくば市とともに、「宇宙センターと科学のまちつくば」の取り組みにより

大賞を受賞しました。

当日は、米倉実副学長のほか、宇宙芸術およびデザインの創造に取り組む芸術系の逢坂卓郎教授、システム情報系亀田敏弘准教授が実施責任者を務める「小型ネットワーク衛星「結(ゆい)」プロジェクト」の学生等の関係者が出席しました。



受賞名	受賞者(所属・学年)	指導・研究室
情報処理学会 平成24年度 山下記念研究賞	関洋平助教(図書館情報メディア系)	_____
上原記念生命科学財団 研究助成	征矢英昭教授(体育系)	_____
日本フットボール学会10th Congress 学会奨励賞	浅井武教授(体育系) 中山雅雄准教授(体育系) 夏原隆之(人間総合科学研究科 コーチング学専攻 3年制博士2年) 伊藤瑞希(人間総合科学研究科 体育学専攻 博士前期1年)	_____
平成24年度文部科学大臣優秀教員表彰	蒔田守主幹教諭(附属中学校)	_____
Outstanding Poster Presentation Award (World Congress on Oleo Science & 29th ISF Congress)	Marcos Antonio das Neves助教(生命環境系)	_____
有機合成化学協会 第31回有機合成化学奨励賞	早川一郎助教(数理物質系)	_____
リサーチフェスタ2012 つくば市長賞(最優秀賞) ソフトイサ賞(総合成績第2位) 金賞 銀賞 銀賞 銅賞	本多隆利 (生命環境学群 生物学類4年) 返町洋祐 (生命環境学群 生物資源学類3年) 西田惇 (理工学群 工学システム学類 3年) 伊藤剛浩 (情報学群 情報科学類2年) 小長谷達郎 (生命環境学群 生物学類4年) 藏満司夢 (〃 4年)	古久保・徳永克男教授(生命環境系) 星野貴行教授 (〃) 鈴木健嗣准教授(システム情報系) 渡辺守教授 (生命環境系) 戒能洋一教授 (〃)
第90期 日本機械学会 流体工学部門講演会 優秀講演賞	田村尚也 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期1年)	阿部豊教授 (システム情報系) 金子暁子講師 (〃)
日本分析化学会関東支部 第9回茨城地区 分析技術交流会 優秀ポスター賞		
第39回有機典型元素化学討論会 優秀講演賞	佐藤久美子(数理物質科学研究所 化学専攻 博士後期3年)	赤阪健教授 (数理物質系 生命領域学際研究センター)
井上科学振興財団第29回井上研究奨励賞	岡本正洋研究員(体育系)	征矢英昭教授(体育系)
SII2012 Best Paper Award	Alexsandr Igorevitch Ianov (システム情報工学研究科 知能機能システム専攻 博士後期1年)	山海嘉之教授 (システム情報系 サイバニクスセンター)
SATテクノロジー・ショーケース2013 ベストプレゼンテーション賞(ベストアイデア賞)	本多隆利(生命環境学群 生物学類4年)	古久保・徳永克男教授(生命環境系)
第2回サイエンス・インカレ 独立行政法人科学技術振興機構理事長賞 サイエンス・インカレ奨励表彰	小村達也(生命環境学群 生物学類4年) 榎本詢子(理工学群 応用理工学類4年)	丹羽隆介准教授(生命環境系) 福田淳二講師(数理物質系)

※所属、職名、学年は受賞時

附属大塚特別支援学校
栄養教諭
土田裕美さん



夏にはベランダで野菜を
実らせプチ食育を楽しん
でいますが、昔から「花」に
関してはなぜかすぐに枯ら
してしまいます。苦手意識
を克服しようとアドバイス
を受け、いろいろと試みるも、何かが違うようです。ところが数年前、私にも育てられる「花」を発見しました。球根の「水栽培」です。子供が保育園で卒園記念に栽培していたのを思い出し、挑戦してみたところ大成功！不安をよそにぐんぐん成長し、きれいな花を咲かせました。また一生懸命に伸びていく根っこを見ると心も和みます。この渦を巻く根っこがなかなか魅力的です。今年はヒヤシンスとクロッカスに挑戦しています。

今回は、附属高等学校 養護教諭の相楽直子さんです。
「実習では大変お世話になりました。お仕事ぶりはもちろんですが、
爽やかでオシャレで女性としても憧れの先生です」

図書館情報メディア系講師
時井真紀さん



日本科学未来館にて 筆者左から2番目

ここ最近、何かパワーが足り
ないなあと感じると、「舞
台」を見ていないことに気が
つきました。ちょっと日常生
活とは異なる世界を感じる
ことができる、「舞台」をみ
ることが私のエネルギー源
です。ちょっと他の人の人生
を疑似体験でき、「へえ〜、
こういう考えもあるんだなあ」と考えさせられる舞台。華やか
さで全く別世界に入り込める舞台。いろんな舞台をみること
で、ちょっと得てきたものもあるような気がします。(気がする
だけなのかもしれませんがね。)様々な世界を作り出してきた
歴史ある劇場の空間からこれからもパワーをもらいます。

今回は、数理物質系准教授の柳原英人さんです。
「磁性関係の研究会でお世話もなっている、いつもパワフルで周囲を
明るい雰囲気にする先生です」

リ シ ー イ ッ セ イ

>>>

附属駒場中学校
副校長
濱本悟志さん



本学で遠距離通勤
をされている方は多
いと思います。わたし
もその一人。毎日2時
間をかけて、三浦半島の葉山から東京
の世田谷へ通っています。ここで、お
国自慢を1つ。葉山から相模湾を望め
ば、北から丹沢山塊、江ノ島、富士山、
箱根と伊豆の山々、そして伊豆大島が海越しに眺められます。
ここでのささやかな喜びは、1コインフィッシング。500円玉で餌
と仕掛け(糸と針)を買い、近くの防波堤で夕食のおかずを
ゲット。海が静かなときは、手漕ぎボートで沖に。最近、海底
のようすや魚の住みかも分かるようになりました。例え釣れな
くても、まわりの景色はいつも温かく迎えてくれます。



今回は、学生部学生生活課の菊池信孝さんです。
「科学の芽賞の立ち上げで苦楽をともにした菊池さん。豪快な中にも
優しさを秘めた茨城男児で、いまでも交流(酒?)が続いています」

体育系准教授
麻見直美さん



最近の楽しみは
「ネイル」。超ズ
ボラな私ですが、
最低限の身だし
なみ！と2〜3ヶ
月に一度髪を切
りに行きます。髪の毛を何とかしてもらっている時間を活用し
て、その時の季節と気分で手や足のネイルもお願いするので
す。Xmasには足の爪が、赤、緑、白、金、銀に！サンタクロース、
雪だるま、トナカイ、星、ひいらぎの絵も加えてもらいました。今
は冬から春がテーマで、手の爪がパステルカラー。雪の結晶か
らちょうちょ、てんとう虫、花と賑やかです。楽しいデコレー
ションになった爪に気づいて、「私にもやって〜」と言ってくる
娘達の笑顔を見るのが大好きです。

今回は、研究推進部産学連携課技術移転マネージャーの柿本茂八さんです。
「世間知らずのヒヨッコがトラブルを抱えていた時、飒爽と現れて
あっという間に解決して下さったのでした」

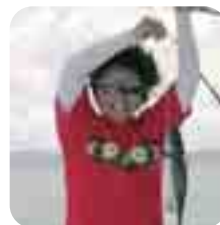
附属桐が丘特別支援学校教諭
田中麻衣さん



4月からの自転車通勤をきっかけに、体を動かすことが日常になってきた昨年秋頃から、ランニングを始めました。それ以前も走ることはしていましたが、思い立った日に…という感じでした。今は楽しくて、週に2〜3回は走りたい!と体がうずうずしています。最近になって、ようやくウェアもそれっぽくそろってきたので、まさに「ランナー」気分です。走っている間は、嫌なことや悩んでいることを忘れることができます。逆に、そのことについて冷静に考えることもでき、頭の中が整理できます。まだまだ趣味の域ですが、これからも定期的に走っていきたくてと思っています。

今回は、附属桐が丘特別支援学校教諭の新田賢司さんです。
「ほぼ毎週のようにフットサルをしている仲間です。これからも一緒に体を動かしていきましょう!」

体育系准教授
齊藤まゆみさん



HAPPY号で海釣りに初挑戦!ピギナーズラックで娘が天然ヒラメをゲット。翌年もチャレンジ、今度は夫が天然ヒラメを…、近所の魚屋さんで刺身にしてもらいお相伴しました。いやあ、歯ごたえもあって美味しかった。そして3度目の正直で次は私が天然ヒラメを狙います。よちよち歩きの頃に天橋立から転落してもぶかぶか浮いていたらしく、いまでも海が大好き。ダイビングでは魚と戯れ、癒されます。あー、南の海が私を呼んでいる、ザブーン…を夢見て、2限が終わるとプールへ猛ダッシュ、昼休みの大学プールでせっせと泳いでいます。

今回は、数理物質系准教授の岡田晋さんです。
「筑泳会の常連、毎日精力的に泳いでられます。愛用のミニ自転車で颯爽と登場、プールの駐輪場で見かけると元気がです!」

T S U K U B A C O M M U N I C A T I O N

体育系教授
椿本昇三さん



サングラスが本人

2年前の中国合宿での1コマです。パンダが我々の手の届く所で、食事をしています。「アンビリーバブルな光景!」に超感激しました。過去10年、何度も中国で合宿しましたが、まさかこのような出会いがあるとは、やはり中国恐るべし!水泳部は中国やタイの格安私費合宿することで、オリンピック選手4名を輩出しています。選手の自主・独立性を高める効果があり、文化・風習・食事など大きな違いを体験することで、国際感覚を高めています。海外合宿は、指導者にとっては、『無償の愛』が試される良い機会です。昨今話題の「愛のムチ(体罰)」とは、無縁のものです。

今回は、学生部就職課の菅野昭さんです。
「体育センター時代からのスポーツ仲間。特に、タイでの水泳部合宿で起きた地震では、心配する父兄の対応に大変お世話になりました。持つべきは友なり!」

総務部人事課
伊藤太平さん



自転車と聞くとすぐに思いつくのは所謂「ママチャリ」(洒落た名前ではシティサイクル車)ではないでしょうか。自分が趣味で乗っているのはママチャリではなく、速く遠くへ走ることを目的とするため、かごやスタンドなどが付いておらず走るのに必要な機能のみを取り出した競技用自転車というものです。この自転車の長所は多岐におよびます。長時間走り続けることができるので、運動不足の解消。同時にカロリーも大量に消費できるのでダイエット効果も抜群。騒音無しな上、エコな乗り物なので、環境に優しい人というご近所からの評判も得られます(笑)自転車を始めたいという方は是非ご一報ください!

今回は、生命環境エリア支援室の田中慶介さんです。
「ひそかに人格者だと思っている後輩で、業務だけでなく私的なところでもいろいろお世話になっています」

※所属、職名は2013年3月現在



本学同窓会組織の茗溪会からの情報や話題などを読者の皆様へ紹介します。

〔茗溪会とは〕 一般社団法人茗溪会（江田昌佑理事長）は、筑波大学同窓会を母体とする社団法人で、1882年に設立されました。同会は、筑波大学およびその前身諸学校（東京教育大学、東京文理科大学、東京高等師範学校、東京農業教育専門学校、東京体育専門学校、図書館情報大学など）の卒業生により組織されており、現在の会員数約5万4000人を数え、その6割以上が筑波大学卒業生となっています。

筑波大学生のために2つの「茗溪賞」を贈る

茗溪会では、従来から芸術専門学群卒業生および人間総合科学研究科芸術専攻修了者を対象に、優れた卒業制作を行った者に「茗溪賞」を贈呈しており、平成24年度は次の3人が受賞しました。

◎茗溪賞(芸術部門)

【芸術専門学群】日本画

「両義性」

澤田 麻実(美術専攻・4年次)

【芸術専門学群】総合造形

「ルーシーの後ろ髪」(磁石による浮遊構造)

成田 敬(構成専攻・4年次)

【博士前期課程】彫塑

「北の文様」

川村さやか(芸術専攻彫塑領域 2年)

また、平成24年度から、大学院修了者を対象に、在学中、研究や勉学の成果を生かし優れた社会貢献活動を行った者に「茗溪賞」を贈ることとし、各研究科の専攻から推薦された次の36人が受賞しました。

なお、茗溪会筑波大学支部で各学群・学類から1名の卒業生を対象におこなう顕彰(茗溪会支部賞)は、今年も20人が受賞しました。

◎茗溪賞(社会貢献部門:大学院)

江角周子(スクールリーダーシップ開発)／中島朋(教科教育)／中村孔一(特別支援教育)／小田桐奈美(文芸・言語)／早川公(国際政治経済学)／坂田章吉(企業法学)／高森厚太郎(法曹)／清水宏悦(国際経営プロフェッショナル)／橋本真太郎(数学)／古賀寛尚(数学)／藤沼大幹(物性・分子工学)／川畑公輔(物性・分子工学)／村田晃一(物質・材料工学)／飯田マリ(社会システム工学)／柴沼佑次(経営・政策科学)／高橋里司(社会システム・マネジメント)／水本佑樹(リスク工学)／崔唯爛(リスク工学)／井上誠(知能機能システム)／善甫啓一(知能機能システム)／那波悟志(構造エネルギー工学)／笠原天人(地球科学)／高橋陽佑(生物資源科学)／渡辺儀一(スポーツ健康システム・マネジメント)／彼谷直子(生涯発達)／中村恵子(生涯発達科学)／曹蓓蓓(教育学)／池谷美衣子(教育基礎学)／平野美沙(心理)／西村多久磨(心理学)／朴賢璘(感性認知脳科学)／根本みゆき(スポーツ医学)／白井祐介(体育科学)／苅山靖(コーチング学)／嶋真史(芸術)／三津石智巳(図書館情報メディア)

※()は専攻名

茗溪会はこの他、学生のサークル活動などでの社会貢献活動に助成金、卒業式や茗溪・筑波グランドフェスティバル、やどかり祭など行事への支援金など、母校・筑波大学に対して全力をあげて支援しています。

「茗溪賞」(芸術部門) 受賞作品



日本画「両義性」(澤田麻実)



総合造形
「ルーシーの後ろ髪」(成田 敬)



彫塑「北の文様」(川村さやか)

「ラグビー部の軌跡」展を企画 4～6月 東京・茗溪会館で

去る1月、筑波大学ラグビー部が全国大学選手権大会準優勝に輝いたことを記念して、茗溪会では、筑波大学体育会ラグビーの歴史と、国立大学初の準優勝に至るまでの軌跡をたどるオープニング・セレモニーと企画展を、東京・茗溪会館で開催します。

【オープニング・セレモニー】

日時: 4月20日(土) 14時から

基調講演: 筑波大学ラグビー部
～これまでと今から～

講師: 中川 昭 氏(筑波大学ラグビー部長)
古川 拓生 氏(ラグビー部監督)

会場: 東京・茗溪会館(東京メトロ「茗荷谷」下車3分)

【企画展示】

日時: 第1期 4月20日(土)～4月30日(火)
第2期 5月11日(土)～6月 2日(日)

会場: 東京・茗溪会館

主催: 茗溪会

共催: 筑波大学



本学の父母会組織である紫峰会からの情報や話題などを読者の皆様へ紹介します。

〔紫峰会とは〕 紫峰会は、筑波大学生の課外活動などを支援するために1977年に設立された学生後援会です。主な事業は課外活動助成事業（援助金の支給など）、学生生活支援事業（緊急貸付金、コピーサービスなど）、広報・普及事業（紫峰会報の発行、UTcollectionの制作・販売など）です。学生の保護者、卒業生とそこの父母の方、教職員など約1万人が入会しています。このコーナーでは、紫峰会が行っている様々な活動を紹介していきます。

紫峰会では、保護者の皆さまから会費をお預かりし、それをさまざまな形で学生に還元しています。課外活動団体援助金の給付などは、紫峰会の顔とも言える「直接還元サービス」です。一方で、あまり目立ってはいませんがコピー・名刺・製本などの「間接還元サービス」も、実は特徴的なものとなっています。

間接還元サービスとは？

紫峰会のUTshop（大学会館店、追越店）では、格安コピー・プリントアウトサービスを行っています。モノクロが1枚5円、カラーが1枚20円で、B5～A3サイズまで同一料金にて提供しています。最近のコンビニエンスストア等では、モノクロが10円、カラーが50

円というのが一般的です。民間業者では価格に含まれる機器のリース費用や人件費などを会費で補填することにより、格安価格での提供が実現しているのです。年間の利用枚数はモノクロ約45,000枚、カラー約14,000枚で、一般価格との差額をコピーをした学生への支援として計算すると、約60万円の支援効果があったことになります。



コピー機の操作を店員から教わる学生

さらに、カラープリントアウトをA3で行い、紫峰会で用意している裁断機で4等分することで、A5サイズのカラーコピーが1枚5円で行えたり、コピー機に、自動原稿読み込みや、自動ソートなどコンビニエンスストア等にはない便利機能が付いているなど、プライスレスな部分も見逃せません。

この他、製本や名刺サービスの取次サービスなど、個人向け有償事業を「パーソナル・サポート」と呼んでおり、この事業全体の支援効果を概算すると年間総額は300万円を超えるものになります。この事業における会費からの補填額は平成25年年度予算で約160万円ですので、効果的な還元事業であると考えています。

「芸術と社会の接点を増やしたい」～田中みさよさん～

今回紹介する学生は、人間総合科学研究科芸術専攻博士前期課程1年の田中みさよさんだ。田中さんは芸術専門学群生の頃から、芸術を中心として様々な活動をしている。大学会館や東京等で、授業の成果発表展やグループ展を含めて作品展示を年に数回開いていたり、T-ACTの企画運営メンバーとして、コーチング講座や楽演祭のポスター制作を行ったりしている。このような絵を描くような活動以外にも、天久保オールスターズバンドの一員として雙峰祭後夜祭コラボステージに出演したり、つくば院生ネットワークのプレゼンバトルにも参加したりと、その活動はかなり幅広い。

昨年の夏、田中さんは青森のねぶた祭に跳ね人として参加した。青森出身の板画家、

棟方志功さんの「ねぶた祭は自分にとって大きな存在だ」という言葉に影響されて、とのことだ。実際に祭に参加して、「今生きている人がねぶたを動かしている熱気を肌で感じた。来年も参加したい」とすっかりねぶた祭の虜になっている。

また、田中さんは2月14日から23日まで、インドのムンバイ近くのガンジャード村を訪れていた。ウォールアートフェスティバルという芸術祭を同村にて開催するので、そのお手伝いをするためだ。インドを舞台に毎年行われているイベントで、今年で4回目を迎える。参加したスタッフの報告会がT-ACTにて行われていたのを見たことが参加したきっかけだという。そこでは、学校の教室に壁画を描いたり、村の子どもたちの夢を描いた連風を上げたり、子どもたちと一緒にミュージカルを開催したりした。言葉がほとんど通じない状況ではあったが、一緒に踊ったり同じ絵を見たり、風を上げたりと体験を共有することで、コミュニケーションをとることができ、コミュニケーションの手段は言葉だけではない、ということが実感できた。



ウォールアートフェスティバル、みんなで踊っている様子

「芸術分野は、世間一般では社会との接点が少ない閉じた世界という認識だろう。しかし、芸術と社会活動が掛け合わされることで、むしろ分野として開いていくのでは。社会と芸術の接点が増えることで、芸術がもっと親しみやすいものとして浸透していった欲しい」と田中さんは以前より思っていた。インドにて、それを実践している人たちと触れ合うことができた。「行って良かった」という言葉以上に、充実した体験をしたのだろう。ひと回り成長した田中さんの今後の活躍が期待される。



筑波大学ギャラリーT+にて、ライブドローイングの様子

Media Appearances

本学関係の主な新聞掲載・テレビ放送一覧(2013年1月～3月)

新聞記事一覧

	記 事	掲載本学関係者	掲載紙(掲載日)
1	附属病院に最高水準の医療機器を備えた新病棟「けやき棟」完成	五十嵐徹也附属病院長	毎日(12.21)読売(12.23)産経(12.24)
2	土岐田昌和とハーバード大研究員と阿部貴晃さんは、哺乳類のコウモリが飛べるようになった謎の一端を解明	土岐田昌和(元本学助教 生命環境系) 阿部貴晃(生命環境科学研究科 博士前期1年)	毎日(12.21夕) 日本経済(1.27)
3	大河内信弘教授らが、肝臓手術をシュミレーションできるシステムを開発。外科医の教育や手術方法の検討などに利用予定	大河内信弘教授(医学医療系)	日刊工業(12.25)
4	▽やっぱり女子でしょ:本学が全日本大学女子駅伝に9年ぶりに出場し、3位入賞を果たす原動力となった、久馬悠、萌の双子の姉妹について	久馬悠(体育専門学群1年) 久馬萌(〃 1年)	東京(12.25)
5	▽未来ナビ①:ロボットスーツ「HAL」を開発した山海嘉之教授	山海嘉之教授(システム情報系) サイバーダイナ	読売(1.1)
	▽未来ナビ②:バイオ燃料を作り出す能力が高い藻「オーランチオキトリウム」を発見し、培養方法の改良を進める渡邊信教授	渡邊信教授(生命環境系)	読売(1.3)
	▽未来ナビ③:本学が取り組むがんの新しい治療法「ホウ素中性子捕捉療法(BNCT)」	松村明副病院長 熊田博明准教授(医学医療系 陽子線医学利用研究センター)	読売(1.9)
6	▽未来はきたか 第1部③:本学学生6人で運営するIT分野のベンチャー企業「ヘアテイル」。本学のベンチャー企業数は全国2位	黒崎賢一(情報学群3年)	茨城(1.4)
	▽未来はきたか 第1部④:本学初の人工衛星ITF-1「結」。亀田敏弘准教授のもと、本学学生約20人が開発に取り組む	亀田敏弘准教授(システム情報系) 浅井英介(システム情報工学研究科 博士前期1年)	茨城(1.11)
7	▽一答両断 いばらき針路図:山海嘉之教授が大学教授とベンチャー企業社長を兼任するのは、研究開発の成果を国民や社会に確かな形で還元するため	山海嘉之教授(システム情報系) サイバーダイナ	朝日(1.4)
8	バスケット全日本総合選手権で、本学女子チームが全日本8強入り	大高敏弘監督(体育系) 北村麻衣(体育専門学群4年) 藤岡麻菜美(同1年)	朝日・読売・茨城(1.5)
9	下野綾子助教は、国内の高山帯で撮影された過去の写真を集め、温暖化による植生の変化を調査	下野綾子助教(生命環境系)	信濃毎日(1.9)
10	ラグビー全国大学選手権決勝戦。本学は、帝京大に22-39で敗れたが、堂々の準優勝	ラグビー部 古川拓生監督(体育系) 内田啓太(体育専門学群4年) 内田啓介(同3年) 彦坂匡克(同4年) 福岡堅樹(情報学群1年) 吉沢広征(OB NECグリーンロケッツ) 坪井彰(OB) 坪井大夢(理工学群2年) 川端隆裕(OB 大分県立日田高校ラグビー部顧問) 川俣ゆかり(体育専門学群4年) 竹田愛也桂(同4年)	朝日・毎日・読売・日本経済・産経・東京・茨城(1.14)
11	本学発ベンチャー企業サイバーダイナは、医療機器に関する品質マネジメントシステムの国際規格「ISO13485」を取得。医療用ロボットスーツHALの製品化に弾み	山海嘉之教授(システム情報系) サイバーダイナ	朝日・毎日・読売・茨城・常陽・日刊工業(1.22)
12	本学と神戸製鉄所は、水素を効率的に大量にためられる合金を開発	石田政義教授(システム情報系)	日本経済(1.26夕)
13	▽花まる先生公開授業:附属小学校細水保宏教諭の4年生・算数の授業紹介	細水保宏副校長(附属小学校)	朝日(1.27)
14	本学は、学長選考会議で、医学医療系教授の永田恭介学長特別補佐を次期学長予定者に選出	永田恭介学長特別補佐	朝日・毎日・読売・日本経済・産経・茨城・常陽・日刊工業(1.30) 東京(1.31)
15	▽どうしました:山縣邦弘教授～腎臓病で口臭が強いという相談に対する回答	山縣邦弘教授(医学医療系)	朝日(1.29)
16	本学教育開発国際協力研究センターの磯田正美准教授が主導し、本学とメキシコ教育省の共同事業として、日本の算数教科書をスペイン語に翻訳。1月から、メキシコ国内の師範学校約460校に通う学生たちが使用を開始	磯田正美准教授(人間系 教育開発国際協力研究センター)	読売(2.4)
17	▽オピニオン:山口香准教授～暴力・パワハラ問題が起きた柔道界の課題と再生について	山口香准教授(体育系)	朝日・毎日・東京・読売・産経(2.7)
18	「いばらきイメージアップ大賞」表彰式で、大賞を獲得した「宇宙センターと科学のまちつくば」(筑波宇宙センター、つくば市、本学)に、賞状と記念品		茨城・常陽(2.7)
19	守友浩教授は、顔料の一種プルシアンブルーの類似体が、「ナトリウムイオン電池」の正極材料として有効であることを確認	守友浩教授(数理工学系)	日刊工業(2.8)
20	小林達彦教授らの研究チームは、有機化合物の「アルドキシム化合物」を「ニトリル化合物」に変換する酵素反応のメカニズムを解明。環境負荷が低く、酵素を用いた温和な条件で合成できる技術の実現につながる可能性	小林達彦教授(生命環境系)	日刊工業(2.13)
21	窪田研二准教授らは、「創造的復興プロジェクト」の一環として、学生が福島県民に取材する記録映画を作成予定。2月16、17日には、震災関連映画の集中上映会開催	窪田研二准教授(芸術系) 有馬俊(芸術専門学群2年) 「創造的復興プロジェクト」体育・芸術エリア5C棟216教室	毎日・茨城(2.14) 読売・東京(2.15)
22	本学は、東京都や東京2020五輪・パラ招致委員会と連携協定締結	清水一彦副学長 真田久体育専門学群長 山口香准教授(体育系)	読売(2.24) 茨城(2.25)
23	本学学生が、講義「創造学群表現学類」の中で、広告業界で活躍するOBの指導のもとに制作したラジオCMを、2月27日より、FMラジオ局bayfmで放送	一倉宏(OB コーピライター) 角田武(OB 電通) 宗田真悠(OB) 山田哲也(広報室) 中尾文哉(芸術専門学群4年)	朝日(2.24)
24	▽講演 防ごう慢性腎臓病(CKD):森戸直記講師～予防と早期発見について/錦健太講師～自覚症状と検査について	森戸直記講師(医学医療系) 錦健太講師(医学医療系 附属病院水戸地域医療教育センター)	茨城(2.26)
25	本学と連携して街づくりに取組んでい稲敷市が、「稲四季弁当」の「春の巻」を完成	貝島桃代准教授(芸術系)	朝日(2.27) 産経・読売(3.4)
26	丸本一弘准教授は、有機被膜太陽電池の劣化が、セル蓄積電荷に関与していることを明らかにした	丸本一弘准教授(数理工学系)	日刊工業(2.28)
27	脳も生殖器官もない生物「珍渦虫」の成長過程を、中野裕昭助教ら国際研究チームが、世界で初めて明らかにした	中野裕昭助教(生命環境系 下田臨海実験センター)	日本経済(2.27) 日経産業(2.28)
28	本学は、3月2日に、シンポジウム「大災害における文化遺産の救出と記憶・記録の継承」を開催	松井敏也准教授(芸術系) 安藤邦廣教授(芸術系) 白井哲哉准教授(図書館情報メディア系)	毎日(2.28)
29	国立大改革のための補助金対象14事業(文部科学省)として、本学と鹿屋体育大のスポーツに関する共同大学院設置が選ばれた		朝日・日本経済(3.1夕)
30	赤阪健教授らの研究グループは、ヘリウム原子の観測ならびに、異種原子を同時に内包させたフラーレンの合成に世界で初めて成功	赤阪健教授(数理工学系 生命領域学際研究センター)	日刊工業(3.6)
31	サッカー日本女子代表安藤梢選手が、著書「世界でたたかうためのKOZUEメソッド」を被災地域の小中学校200校に寄贈	安藤梢(人間総合科学研究科博士後期3年 ドイツ・FFCフランクフルト) 西嶋尚彦教授(体育系) 熊谷紗希(体育専門学群4年 ドイツ・FFCフランクフルト)	茨城(3.9) 常陽(3.10) 毎日(3.11) 読売(3.13)

テレビ放送一覧

	内 容	出演本学関係者	放送局・番組(放送日)
1	「次世代科学者養成講座SSリーグ」の活動の様子	山村正樹講師(数理工学系) 出川洋介助教(生命環境系 菅平高原実験センター)	NHK総合 「ごんにはいって6けん」(1.28)
2	超高齢社会である日本の公共図書館が提供すべき新しいサービス内容について	溝上智恵子教授(図書館情報メディア系)	NHK総合 「視点・論点」(高齢社会と図書館)(1.30)

※所属、職名、学年は2013年3月現在

Event calendar

4 april

- 1日(月) 春季休業(～7日)
- 4日(木) 平成25年度全学TA研修会
(第2回筑波大学FD研修会)
- 8日(月) 入学式
附属小学校入学式
附属桐が丘特別支援学校入学式
理療科教員養成施設入学式
- 9日(火) 附属中学校入学式
附属駒場中学校入学式
附属高等学校入学式
附属駒場高等学校入学式
附属坂戸高等学校入学式
附属視覚特別支援学校入学式
附属聴覚特別支援学校入学式
附属大塚特別支援学校入学式
附属久里浜特別支援学校入学式
- 10日(水) 新入生オリエンテーション(～11日)
- 12日(金) 春学期授業開始

5 may

- 18日(土) 春季スポーツ・デー(～19日)
- 24日(金) 第39回 やどかり祭 (～25日)

6 june

- 3日(月) 出願受付「帰国(10月入学)／
編入(7月入試)／(ACⅡ)」(～10日)
- 14日(金) 附属小学校学習公開・
研究発表会(～15日)
- 26日(水) 春ABモジュール期末試験(～7/2)
- 28日(金) 第1次選考合格発表(ACⅡ)





筑波大学
University of Tsukuba